
転生は万病の元...orz

P A N D O R A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生は万病の元：orz

【Nコード】

N1620M

【作者名】

PANDORA

【あらすじ】

あまりにも物事に無関心で、世界に価値を見出だす事が出来ない少年は、ついに自分の命にすら興味が失せてしまい……自ら自分の命を絶った。

そんな少年がまさかの、二次元の世界へ強制的に転生させられた！？

「初めまして、この小説の主人公の七詩 虚です。取り敢えず読んでくれなきゃ、作者が泣くぜ？（どうでもいいけどな……）」

泣きはしません。…落ち込むだけです。

頑張りますので、暇潰しにでも読んでいってください。 m (

m

第1話／ウルサイ始まり。（前書き）

恥じまして…間違えた!!

／／／うおっほん…え、初めましてPANDORAです。ここに掲載されている二次創作たちに影響を受けて始めさせていただきました。処女作なうえに不定期更新、更には亀なみの遅さになってしまいうですが、精一杯頑張らせていただきます!!そして楽しませていただきます。

それでは本編をどうぞ!

第1話／ウルサイ始まり。

「~~~~~」

『携帯電話のアラーム音が部屋に響き渡る。』

朝か。

「~~~~~ピツ……」

『アラーム音がなりやむ。アラーム音を響かせていた携帯電話の持ち主が起きたようだ。』

朝から賑やかだな。

「ねみ〜。つかダリ〜。」

『寝起きの第一声が、だらしが無いの一言に尽きる。』
ウルサイな。

「だらしなくて悪かったな、糞野郎。」

『オマケに口も悪い……あと電波を受信しているらしい、可哀想に。』

「ヒトの事を勝ってに可哀想な子に仕立て上げるな。あとそのナレーション口調止めれ、うざいしキモいし壊したくなってきた。」
いやマジで。

『果たしてこの可哀想な子は一体絶対誰に何を言っているのだろうか?』

調子に乗りやがって、デバイスの癖に。

「なああベリアル？万力と灼熱、あとは分解、どれがいい？選ばせてやる。」

『申し訳ありません！！マスター！ちょっとしたジョークですよ！ジョーク！』

以外とチキン野郎だな。

「デバイスがジョークとか、無駄な機能だな。いつそのこと有人格型アームドデバイスから非人格型アームドデバイスに改造しおうかな。」

『それだけのご勘弁を！！てか、マスターそんな事出来たっけ！？』

「……………」

しらね、知ってるはずがない。何故なら…。

『…ツボシ？』

「うつさい！万力に掛けんぞ！」

俺がコイツ（有人格型アームドデバイス、名をベリアル）を手にしたのは、つかそれ以前に、この世界に生まれた？（つか到着した？）と言うより着いたかな？）のは…

『すいませんでしたー！！てか万力何て何処にも無くね？マスター！つておっちょこちよいさん？』

「？…握り潰す！！」

ほんの、

『ヒィ〜!どうかお助けお〜!!』

「なら暫く黙ってる。」

『了解!.....』

「それで良い。」

ほんの2日前なのだから。

第1話／ウルサイ始まり。（後書き）

どうでしょうか？字余りや字足らず、字の間違えなどが有りましたら、なんなりとお申し付け下さい。他にも至らぬ点などが有りましたらお申し付け下さい。

直すよう努力させていただきます。

それと、ご覧いただき誠にありがとうございました。

オリキャラ設定（前書き）

今決まっている設定です。

オリキャラ設定

＊主人公設定＊

名前

ななしつろ

〔七詩虚〕

年齢

転生前

16歳

転生後

5歳（戸籍上）

身長

転生前

169.8cm

転生後

115.7cm

外見

髪の毛の色

灰色

瞳の色

緋色

（転生前は黒目黒髪）

髪型

D M Cのダンテの髪型の後ろを少し長くした感じ。（普段は縛って纏めてある。）

魔法

魔力光

赤黒い色

使用魔法

古代ベルカ式

魔力量

S - （増える予定）

総合魔導師ランク

A A A + （更に強くなる予定）

魔力変換気質

炎熱系

その他詳細

顔は中の上でなかなか良い顔立ちをしている。性格は自分勝手、気分屋、マイペース、無神経、で周りからすれば嫌な奴。だが、気に入った者はわりと大事にする。（過剰なほどに）

好きなものは、インスタント食品、甘味、本、変人（変態は嫌い）。嫌いなものは、昆虫、普通過ぎる奴。

基本的には何に対しても無関心で更には無視を通そうする。だからあ

る程度の受け答えはする（仕方なく）。気になるやつにしか声を掛けない。転生して今までとは違う事柄に触れることで、少しずつだが周りに興味を示し始めた。
普段着は主に浴衣かジャージ。

デバイス設定

名前

ベリアル

外見

待機状態

赤黒い色をした菱形の宝石が埋め込まれたペンダント（というよりネックレス）。起動状態
見た目はほぼDMC4のギルガメスだか足も隠れてる（足の方だけはDMC3のベオウルフにギルガメスを足した感じ）。

バリアジャケット

上半身は半袖でフード付きの赤いパーカー、その上に黒いタクティカルベスト。

下半身は黒い長ズボン、生地は革（見た目は）。

デバイスの非装備時は、手にはハーフフィンガーグローブ、足には黒色の安全靴。

非戦闘時ではこれ等の上に黒の下地に背中に赤い十字架の刺繍がはいたロングコートを着用している。（こちらの方が防御力が高いので、奇襲対策としてベリアルが発案）

詳細

男性型の有人格型アームデバイスで、性格は好奇心旺盛、気分屋

でK・Y・（空気読まない）、暇になつては七詩 虚（以後、虚）にちよつかいを出す。気になる物があつては虚に買わせ、あとで解析している（主に食べ物）。

虚のことは割りと気に入っている。主に自分勝手な所が一緒にいて楽しいらしい。

＊固有使用魔法＊

強化系

グレンエンブ
紅蓮炎舞

四肢に炎熱系の魔力を纏う技。主に攻撃力の底上げに使う。

防御系

ゴクエンガイソウ
獄炎外装

炎熱系の魔力を全身に纏う防御技。精神甲冑。

バクエンジュン
爆炎盾

面ではなく点で守るタイプの障壁。敵の攻撃を防御すると同時に爆裂して敵を吹き飛ばす。防御後の硬直やバリアブレイク対策。

補助系

エア・トリック

空中に足場を作る技。大きさや強度、数等は自由自在で空中を逆さまになつて歩くことも出来る。戦闘時は飛行魔法よりもこちらの方が使う場合が多い。

コウダン
煌弾

目眩まし。見た目は普通の魔力弾と同じ、隙を着くために使う。

近距離攻撃系

エンゴクケン
炎獄拳

炎熱系の魔力を拳に集めての殴り。 AゝA A A +

遠距離攻撃系

グレンエンゲキハ
紅蓮炎撃波

炎熱系の魔力を手のひらの内で、球状に凝縮してから一気に敵に解き放つ技。

まあ……かめ。め波の色違いです。 A AゝS S +

以上、今決まっている詳細設定でした。

オリキャラ設定（後書き）

こんなんで大丈夫ですかね？

第2話／始まりの記憶（前書き）

文章を作るって、やっぱり難しいです。

第2話／始まりの記憶

「どうでもいい。」

俺こと「七詩^{ななしうし}虚」が日頃から、よく呟いていた言葉だ。

2日前

「行つて来ます。」
いつもど通りの朝。

俺は家出て、現在在学中の高校に歩を進める。
ちなみに荷物は携帯電話と財布だけだ。荷物が多いとかさばるから、授業で使う物は全て学校に置きっぱなしである。（まあ置いてあっても使わないが…）

いつもど通りの道を歩き、いつもどおり、他の学生に紛れて、俺は学校に着いた。

……そう、ここまではいつもどおりだった。

俺が学校の校門を潜ると同時に、1人の生徒が声を上げた。

「なあ、あれ…此方に向かって来てね？」

誰かは知らないが、その声が聴こえた瞬間に、聞き慣れない音が、俺の耳に届いた。

「ゴオオー」

何か大きな物の風切り音と、飛行機にも似たエンジンの噴射音だ

「ヤバイって！あれ、ぜったい此方に向かつて来てるって！」

「早く逃げようぜ！んなモンに突っ込まれたらひとたまりもない！」

「…ドタドタドタ！」

ここまで来たら生徒たちは色々な所に逃げていく。

…俺1人を残して。

さっきより音が近づいて来てるのが分かる。

そこで俺は後ろを振り向く。

そこには…

「…でっけー…。」

大きな、旅客機が…

「っーか、ウルサっ…。」

俺を目掛けて、突っ込んできた。

俺が本格的に物事に興味が失せて来たのは、中学一年の頃からだ。
…別に何か会ったわけではない。…いや、何も無かったからかもしれない。

「ここは？」

目が覚めたら俺は病室にいた。…いや、詳しく説明すると…

「…病室のベッドの上に寝ていた、だな。」

俺がそんな下らない戯れ言をほざいていると…

「ガラガラガラ」

誰かが病室に入って来た。

「もう気がついたのかね？」

病室に入って来た白衣を着たおっさんが、俺を見るなり、そう問い掛けてきた。

それに対して俺は…

「…そうみたいですネ。」

さぞどうでもよさそうに答えた。

白衣のおっさんが曰く、旅客機は俺に突っ込んではいないらしい。

…詳しく説明するとだな、旅客機は俺の一手前で止まったらしい。まあ俺に突っ込んで来るよりも先に、地面に衝突して機体を地面に引き摺らせながら俺に突っ込んで来ていたわけだが、摩擦による抵抗のお陰でブレーキがかかり止まったらしい…ではなぜ俺が病院に居るのかと言うと、旅客機の破片の一つが腹に直撃したらしい。その反動で俺は倒れ、頭を打って気絶、旅客機の乗客共々この病院に運ばれたらしい…。

まあそんな訳でその日のうちに無事退院…

とはいかずにも病室のベッドの上である。

白衣のおっさん曰く…

「今日1日は絶対安静。」

だそうだ。さらには…

「その日のうちに目が覚める時点でおかしい。」

らしい。それに…

「旅客機の破片がぶつかって、さらには頭まで打ったのに、外傷が頭のたんこぶだけ。」

つてのも、おかしいらしい。…まあ、「運が良かった」と言っ
てしまえばそれまでだが。

その日の夜、俺は病室を抜け出して病院の屋上に来ていた。

普段のこの時間なら鍵が掛かっているであろう筈の、屋上への扉…
まるで俺のことを誘っているが如く、鍵があいていた。

なぜ俺が夜の病院の屋上などという自殺の名所とも言えるような場
所に来ているかというと、…まあ自殺しに来た訳である。

理由？…そんなもの
「無いね。」

これは断言出来る。と、言うよりも、理由が無い事こそ俺の自殺の
理由なのだろう。

死ぬ理由が無いというのは、生きる理由も無いと一緒だ。まあ逆も
また然り。

俺にとっては「どうでもいい」自分の命さえ。…だって、

「興味無いから…」

俺は興味が無くなっていた。学校の事や将来の夢、または人間関係や恋愛などに、…他人の命や自分の命さえ。

例えば俺の目の前に地球を爆破出来るスイッチがあったとしよう。

…あったとしよう。

俺はどうするかって？…なにもしない。だって興味無いから。

じゃあ誰かが「押してみる」と言ったら？…押すだろう、迷い無く押すだろう。だって興味無いし、他人がどうなろうと、自分がどうなろうと…。

まあそこから導き出される答えは？

「生きてたって、死んでたって、変わらないじゃないか…。」

と言う訳である。

「さて、…死にますか。」

その日、1人の少年が死んだ。アスファルトに血の花を咲かせて。

そう、ここで終わる筈だったんだ。何もかも。

今、俺の目の前に居る、この頭のイカれたじいさんさえ出て来なければ。

第2話／始まりの記憶（後書き）

変な所とか無かったですか？個人的には上手く出来た気がするのですが…。

第3話／ありがた迷惑（前書き）

第2話の続きです。

主人公の虚が少し壊れます…キャラ崩壊？
それではどうぞ！

第3話／ありがた迷惑

目を開くと、其処は純白の世界だった。

前を見れば白、右を向けば白、左を向いても白、後ろも白、序でに上も足元も白の完全に純白の世界に俺は立っていた。

「ああー、気持ち悪くなってきた…。」

当たり前だ自分以外は全部、白。平衡感覚もクソあったもんじゃない。

それに気味も悪い。自分以外誰も居なくて、自分以外の声や息づかい、衣擦れの音以外は何も聞こえない。

「…取り敢えず、歩くか。」

「ペタペタペタペタ」

辺り一帯に俺の足音が響く。あと俺は裸足だったらしい。そいえば自殺する時に靴を脱いだ気がする。

「ペタペタペタペタ」

「ペタペタペタペタ……？」

どれくらい歩いただろうか。急に俺の目の前に、ドアノブが現れた。
「ドアノブだけってのは、なかなかシニールだな。」
正直な感想を述べてみた。目が覚めたら純白の世界で歩いていたら
たらイキなりドアノブが目の前に現れたり、世の中不思議だらけだ。

「…つーか、俺、たしか死んだよな。」
飛び降り自殺で。何で生きてんの？まさかここが天国？

「…無いな。」
影が無かった、序でに頭の上にリングすら無い。

結論

「死んでも足はある、だが影が無くなる。序でに頭の上にリングは
付かない！」
ちよつと強めに言ってみた。

まあ、ここが何処だろうが、今の俺がどうだろうが…
「…どうでもいいか。」

俺はその場に寝転ぶ。
そして寝る。

筈だったんだが。

「ガチャリ」

さっき出てきたドアノブが回り出して、さっきまでは無かった筈のドア見たいのが出てきた。

そして…

「バーン！」

「さっさと開けんかい！」

杖を持ったジャージ姿のおじいさんが、勢いよく飛び出て来た。

「ところでさ…あんた誰？」

俺はもつともな質問を試みた。……あらかた予想はついて居るのだが…。

「フッフッフ、聞いて驚くなよ？私は神さm「ハア」…」って、何故にため息！？」

いや、予想通り過ぎて呆れたんだな、これが。
まあいい…

「…それで、自称神様さんは俺に何の用ですかい？」

「お主！私が神様だということを全く信じてないじゃろ！？」

当たり前だ、いきなり出てきて「私は神様です」なんて言われても信じる訳がない。

…それがジャージ何て着ててみる、俺には絶対に信じられん。

「…まあさ、信じる信じない云々は兎も角さ、何のご用で？自称神様さん？」

「信じる気はないか…、まあ仕方ないのお。さてお主に用とゆうの

は他でもない。お主には第2の人生が与えられる事になった！」

「…はあ？」

意味不明だ。

「まあ驚くのは無理もないの、死んだと思ったら神様が目の前に現れて 第2の人生 与えますじゃもん。…どうじゃ嬉しいじゃろ？」

わけわからん。なにが神様だ、なにが第2の人生だ。わけが分からねー。

「ちょっといいかい、自称神様さん？何でお「フオツフオツフオツ！やっぱり嬉しいか？嬉しいじゃろ嬉しく無いわけがない」…はあ。」

聞いちゃいねーよ。

「因みに第2の人生は5歳からスタートじゃ！転生序でに今ある記憶の持ち込み可能、さらにはお金や戸籍に住居まで付いていて！さらにさらに…！？」

自称神様さんはここまで話したら急に俺の耳元まできて、囁いた。

「今ならもなくマル秘サービス付きじゃ…。」

「……ハア?…」

さらにわけが分からねー。マル秘サービス?なんだそれ、つかサービスの中身は教えてくれないわけ?

「因みにお主が転生する世界には魔法が存在しているぞ、どうじゃ?これからが楽しみでしかたないじゃろ!?’

魔法?胡散臭いな、つか別に魔法何て無くてもよくね?……いや、正直少し興味は無いことも無い。

「まあ、魔法は運が良ければ出くわすかも、ていどじゃが。」

意味ねー。なにそれ運が良ければって、無責任にも程があるだろ!?

「フッフッフツ。」

安心せい、お前には最初から魔法の才能が備わつとるわい!」

何が「安心せい」だよ。別に魔法が自分に使えるか、なんてどうでもいいし。

……まあ、機会があれば使ってみたいが。

なんかおかしくね？……あつ。

「ちよつとまで自称神様さん、何でも俺が転生することが決まったみたいな流れで話が進んでるんだ？おかす」「それじゃあ第2の人生初めてみようか！！」…無視かよ！！」

っーか…

「人の話し聞けよ！！」

「なんじゃい！折角テンション上がってきた所で！」

逆ギレかよ！？つかこいつ楽しんでんだろ！？

まあ、そろそろ伝えとかなきゃヤバイな

「いやいや、別に俺は第2の人生なんて要らないんだけど。」

数秒の静寂の後…

「……………今さら？」

自称神様さんの、物凄くがっかりした声が純白の世界に響き渡った。

何が「…今さら？」だよ。おまえが俺の話を聞かないから悪いんだろ。

「…本当に要らないのか？」

確認の為に聞いてきた。

俺はそれに対して…

「ああ。」

の、二文字で応えた。

「やせ我慢するなよ？それとも俺のことが畏れ多くて遠慮しとるのか？そんなこと気にせんでいいんじゃないよ？」

しつこいな、つか誰がおまえ何かに遠慮するか！…まあ、今はそんなことはいい。

「…やせ我慢とか遠慮云々じゃない。…たださ、たいした興味が無いだけだ。」

さあ、俺を転生させるのは諦めろ。

「……………そうか。」

おっ？やつと転生取り下げかな？

「まあ、態々いろんな意味で頑張ってくれたのに、悪いな」「転生スタート！！」って、おまえ俺の話しちゃんと聴いてた？！」

自称神様さんの言った言葉に続けて、俺の足下が光を発しながら歪んでいく。

てか、マジで！？

「おい！ふざけんなよ、今までの俺の話し聴いてたよね！？何でこくなるわけ！？」

この、今一番の疑問に対して自称神様さんは…

「ええー、神様はお主が言っている言葉の意味が、全く理解出来ませっーん。」

うざー！？本気でウザイよこのジャージ姿の神様さん！！

「ふざけんなこの野郎！！」

と、ウザ神を締め上げようと足を一步踏み出した瞬間に…

「…へっ？」

落ちた。

必然的に俺の視界から、あの憎たらしいウザイ神が遠ざかっていく。

「ええー！！！！！！？」

すると突然、混乱する俺の頭に、さっきまで目の前にいたはずのウザ神さんの声が聴こえてきた。

（お主に2つ言い忘れてた事があったのお。まず1つ目、お主が転生する世界は魔法少女リリカルなのはと言っ、まあ、アニメやマンガなどの世界のパラレルワールドじゃ。）

……はっ？なにそれ？魔法少女リリカルなのはってなに！？

（それと2つ目は、…まあ、頑張れ♪）

………。

「…ブチー!!」
ふざけるなー!!」

ここで本日二度目になる意識が途絶えた。

第3話／ありがた迷惑（後書き）

どうでした？変じゃ無かったでしょうか？

第4話／転生終了。そして…（前書き）

時間をかけたものの、大して文字数が稼げなかったです。
…やっぱり難しい！

てか今だに主人公のキャラが、うまく定まらないです。

取り敢えず読んでみて下さい。お願いします。

第4話／転生終了。そして…

『初めまして、私の名前はベリアル、古代ベルカの有人格型アームドデバイスです。』

今、俺の目の前にさ、喋るペンダントが浮いている。……どう対応したら良いのか分からネエー。

まあ、なんでこんな事になったかは、数十分位遡る。

数十分前

「ふざけんなー!!」

この言葉と共に、俺はベッドから飛び起きた。

「……あり？」

本日四度目の意識の覚醒は、またもやベッドの上だった。というか何で…

「……俺の…部屋？」

周りを見回したら、夜なのか暗くて確認しづらいが見覚えのある机やタンスなどの家具が目映った。

今までののは何だったんだ？まさか全部夢とでも言っのか？だとしたら…

「…とんだ悪夢だったな。」

「カチコチカチコチ…」

部屋に時計の針が進む音が木霊する。

そういえば今何時だ？ふと俺は思い、枕元に置いてある自分のケータイを手取る。…？

「…何かデカくね？」

妙にケータイがしつくり来ない。…まあ気にしても仕方がないので、さっさとケータイを開いて時間を確認する。

そして次の瞬間、俺の顔は驚愕の色に染まる！

「…おいおい、何の冗談だよ！？」

俺は驚愕した、時間にはない。いや、時間にも驚きはしたが、重要なのはそこじゃ無い。…日付だ。日付が変わってないのだ。

俺が自殺した日付と…。

いや、冷静になって考えてみる。

あれらが全部夢だと考える！

そうすれば自ずと安心感が湧いてきた。

そっさ、あれは夢だ。旅客機の事故も自殺した事も……あのジャー

ジを着たムカつく神様さんも。

そう、今日俺は一日中を寝て過ごしたんだ。

「…グウ…」

「ハラ、へったな…。」

安心したら腹がへったから、とりあえず台所に行くことにした。
ベッドを降りて、電気を点けようとした所で、身体に違和感を憶える。

…届かない。文字どおり、紐に手が届かないのだ。

何故？Why？どうしてだ？途端にイヤな言葉が頭を過る。…あのジャージを着た神様さんの言葉だ。

―第2の人生は五歳からスタートじゃ…―

その言葉を振り払うが如く、俺はジャンプして電気の紐を握り、おもいきり引つ張る。

そして、床に着地するとほぼ同時に電気が点いて…俺は後悔する。

部屋の隅に置いてある、大きめの折り畳み式の鏡に映る、自分の姿を見て…

「…ハ…ハハ…誰だよ…これ…。」

そこには灰色の髪色に、緋色の瞳をした少年、と言うよりも幼い、幼年？が、其処には、鏡には映っていた。

俺は動揺が隠せない。

どうやら俺は、本当に転生と言うものを体験したらしい…。

「…どうでもいいよ…もう。」

不意に口にするこの言葉が、俺の心の波を、鎮めてくれる。プラスでもなくマイナスでもない、ゼロの地点に心が落ち着いてくる。

俺にとってこの言葉は、俺自身を指し示す言葉。どうでもいい、この言葉を聴くだけで俺は、俺のあり方を思い出す。…何に対しても無関心な俺を。

取り敢えず服を着る。鏡に映った俺は服を着ていなかった。必然的に俺自身も服を着ていない事になる。

…因みにアレは無くなっていた…。言わなくても分かるだろ?…毛だよ。

こんな下らない考えが出来るほどに、いまの俺は落ち着いていた。因みに時間は22時37分。…転生前に、病室を抜け出す時に確認した時間より、約1時間たっていた。

服は、仕方がないからタンスの中にしまつて有った、半袖のシャツを一枚だけ着た。俺は小さい頃の洋服は、親が死んだ時に全て捨ててしまった。親が死んだのは中学二年の秋の中旬に、旅行先で事故にあつて死んだ。その時一緒だった弟も死んだ。その時俺は、どう

しても外せない用事があつて、旅行に付いて行けなかった。
感傷的になるつもりは無い。俺は、家族の死を知った時に、何も感じれ無かったから…。

…さてと、

「腹ごしらえでもしてきますか。」

そう呟いて、部屋を出ようと、扉に向かって歩きだした矢先に、俺の部屋を中心辺りに、魔方陣？みたいのが現れて、光り輝き出した。

「…ッ！？…」

あまりにも強い輝きに俺は目を瞑る。

次に目を開けたら、魔方陣？は消えていて、代わりに…

「……ペンダント？」

赤黒い色の菱形の宝石が埋め込まれたようなペンダントが中に浮いていた…。

…まあ、これが数十分位前のことだ。

『…おい、無視か？無視するのか？無視すんな、せめて返事の1つや2つはしてくれ。』

口調がさつきと違うぞ？此方が素だな。つかアクセサリーが喋るとか俺の周りは怪奇現象のオンパレードだな。転生体験も含めて…。

『…ちっ！今度のマスターは耳つんぼかよ』『ボソ…』

そこからの俺の対応は早かった。目の前のお喋りペンダントをひっ掴み、壁に投げつけ、近くの机の上に置いて有ったボールペンを三本、ペンダントに向かって投擲。

「ヒュン！…スカカカン！…」

瞬時にお喋りペンダントを壁に張り付けにした。

「言葉使いに気を付けろよ、このお喋りペンダント！」
ちよつと凄んでみた。

『すつ… すいませんでした〜！てかマスターが無視するのが、抑の元凶だぜ！？』

…ごもつともで。つか、あゝやっちまった。壁の修理代いくらかかんかな？

取り敢えずこのお喋りペンダントがうるさいから、そろそろ相手をしてやるか。

「すまんすまん、ちよと考え事をな。…まあさつきは自己紹介有り難う、ついでに俺の名前はマスター何かじゃねえ、七詩虚だ。転生仕立ての自称人間だ。…自称人間ってのは、まあ色々な事情がある。今は気にしないでくれ。」

…事情があんだよ、色々と。

『…ハアア、事情がねえ。ところで、転生仕立てってのは何の冗談？冗談にしたって痛過ぎるぜ（笑）？』

その言葉と同時に、もう一本ボールペンを放つ。

「ヒュン！…バキン！！」

今度は力加減を間違えて、ボールペンは壁に当たると同時に砕け散った。

『ヒイツ！』

その事に、ベリアルと名乗ったペンダントは情けない電子音をあげた。

「…ベリアルとか言ったな？世の中さ、気にしちゃいけない事が一つや二つはあるのさ…。お分かりいただけたかな？」

俺の問いにベリアルは…

『YES、My Master！！』

つと、力強く答えてくれた。

「良い返事だ。…さて、俺は腹がへったから台所に行くが、オマエはどうする？」

正直コイツをこのままにして置くのは、危険な気がする。いきなり人の部屋に現れるようなヤツを、一人？にして置いて、何をやらかしてくれるか、分かったもんじゃない。それに、聞きたい事も山程あるし。…どうやって俺の部屋に現れた？とか……。

台所

「アアッハツハツハーハアッハツハツ…サイッコー♪マジサ
イコー♪」
♪そんなでもって傑作だ、そのはなし♪

…だよなー、そうなるよな。分かってたさ、そんな要な反応されるのわ。けどな、流石にム力ついた！！なにその笑いかた！？物凄く腹がたつ！！

俺は出しっぱにしてあった包丁をベリアルに向けてぶん投げる。

「ビュン! ストン!」

「チツ！」

外した……。しかもまたテーブルに刺さった。

『危な！？…てか、そのスグに物を投げるの止めるよ！！凄く危ないぜ！？つかオイラが壊れたらどうするきだ！』

なんか叫んでるが、そんなの決まってるだろ……？

「物を投げるのは、オマエがウザイからだ。ついでにオマエが壊れたら、燃えないゴミの日にだす。」

「……ひつでえー！？物凄くひつでえー！？古代ベルカのデバイス様を燃えないゴミ扱いかよ！？あり得ネエー！？今度のマスター最低ダー！！！」

ウルセー。凄くウルセー。近所迷惑も甚だしい。

先の会話で分かるだろうが、俺達は自分達の事について話し合った。

…その結果がこの惨状だ。テーブルには先ほどの包丁を始め、果物ナイフ、フォーク、食卓用ナイフ、バターナイフ、パン切りナイフ等が、所々に突き刺さっている。…言い訳は有る、ベリアルが茶化して来たからだ。

が、流石にやり過ぎた…orz

…まあ、取り敢えず俺達は話し合った訳ですよ。つかいまだに信じ難い。魔法か、確か古代ベルカ式とか言ってたな。俺にも使えるらしいが、ホントに使えるのか？しかもこの糞五月蠅いデバイスを使つて？

…出来る気が全くしない！取り敢えずこの問題は保留だな。

因みにベリアルが此処に来た理由は、中々に単純だった。

曰く、『気がついたら、監禁されてたんだ！！』

らしい。オマエの場合は多分、保管だろ。

曰く、『最後のカートリッジを使って、転移魔法で抜け出したんだ！そしたらオイラのマスターになる素質の反応があったから、もう一度転移したら此処に着いた。』

らしい。ご苦労様です、

つか素質ってなに？と聞いたら、

『主に魔力量と魔力光の色だな。』らしい。

詳しい説明も受けたから分かるが、大した事ない理由だな。っと、言ったら、

『魔力量は大した理由にはなら無いけど、マスターの魔力光はかなり珍しい！』

まあそんな訳で、俺の事も話したんだが…

『アハハハハ！てか無理矢理転生させられたとか…ッハハハハア！ダッセー』

こんな有り様だ。てか、またこの野郎笑い出しやがった！？どんだけ俺の事を貶せば気が済むんだよ！？マジでブツ壊そうかな？

「そろそろ黙れよ、糞デバイスが。まだ話しがあんだよ。」
取り敢えず、一度黙って欲しい。じゃなきゃ話しすらろくに出来やしない。

『すまねえー、話しのあまりの唐突さと現実味の無さに笑いが止まらなくなっただけ…っで、話して？魔法関連について？それともマスターの話の続き（笑）？』

この野郎…。

「オマエさ、俺の話し、信じて無いだろ？」
と、言う俺の質問に対してベリアルは…

『信じる信じないは兎も角、マスターが嘘をついている要には見えない。ただ、…神様がジャージを着てきたって所から…ブツ！』

その気持ち、解らんでもないよ。実際にあった俺でも、今思い出すと笑いそうになる。…まあ、それは兎も角…

「じゃあオマエも俺も、お互いに話しを信じるってことでいいな？」

『おう！信じる信じる！てか、さっきから気になってるんだけどさ。マスター力強すぎね！？いくら魔力による強化が加わっていたとしても、五歳児とは思えない身体能力だぜ？』

…そりゃー、まあ…

「体質だな。転生前にも何度か聞かれた事がある。俺の身体の、主に筋肉だな、そこが一番の原因らしい。俺の筋繊維は生まれながら

に常人よりかなり細くて、更にかなり量が多いらしく、それに併せるようにして成長したら、こんな身体になっちまうらしい。因みに転生前は800キロを片手で振り回してた。…まあこれが自称人間の理由だったりする。」

つか転生すんなら、この体質無くして欲しかったかも…。

『…すげー、つかマジでレアな体質してんのな。つか強化魔法無しで、しかも片手一本で800キロとかヤバイな！マジでパネエ！。

聖王様もビツクリだぜ！』

…なんか喜んでない？コイツ喜んでる？

「…オマエ変わってるな。大抵の奴らは、この話を聞いたら俺の事をバケモノ呼ばわりしてたがな。」

『は？そんなくらいでバケモノ呼ばわりしてたら、魔法はどうなんだよ？砲撃魔法とかヤバイぜ？あんなの撃たれたらひとたまりないぜ！？殺傷設定とか相手が並以下の魔導師でも無い限りミンチだぜ！？下手したら塵も残らないぜ！？』

ごもつともで。因みにさっき魔法関連の説明をされた時に、証拠として魔法を使った戦争の映像を見せて貰ってはいるが。感想は…惨い一言に尽きる。あんなにも簡単に人の命が散っていく様は、初めて見た。嘔吐には至らなかったものの、かなり残酷だった。

さて、

「まあ、更に詳しい話しは次に起きた時な？流石に眠いぜ…ふあゝ

あ。」

時間は既に午前3時をまわっている。

『別に構わないぜ。オイラも起動したばかりで本調子じゃないしな。イイぜ今日はおひらきと言うことで。』
…「プツン…」

どうやらスリープモードに入っただらしい。

それにしても…

「……寝みいー。」

その後俺は、取り敢えず台所を簡単にかたずけてから、スリープモードに入ったベリアルを持ち、自分の部屋に戻り、ベッドに倒れこむようにして寝た。

第4話／転生終了。そして…（後書き）

やっぱり文字数足りないでしょうか？

…デバイスの一人称が『オイラ』って変ですかね？
てか、感情豊か過ぎましたかね？私個人としてはアリなんですが…。

第5話／疲れる1日…。（前書き）

… やつと原作キャラクターが登場です。

… れいのあの人より恐ろしいあの人の登場です。

つか遅くなつてすみませんでした！！

誤字や脱字など、原作キャラへの違和感などが会ったら、是非ともお申し付け下さい。

それではお楽しみください。

第5話／疲れる1日…。

「買い物に行くか。」

今日、起床と同時に俺が発した言葉だ。

理由？そんなもん決まっているだろ…衣類だ。今の俺が着れる服は、今現在この家に無い。今だってブカブカの半袖のシャツ一枚だけを着ている。こんなんで街中を歩いてみる、ソツコウで補導される。

…てな訳で、まだ一向に起きる気配のない…いや、機械だから起動か？どっちでもイイか。まあ、ベリアルを首に架け、財布を持ち、家を出る…

前に、風呂場に直行。因みに俺は転生日の次の日は、寝て過ごしたらしい。日付が変わっていた。そんな訳で転生3日目、俺は2日も風呂にはいつて無いという、不清潔極まりない状態な訳である。

台所

俺は久しぶりにスツキリ&サツパリな気分で、朝食をとっている。…風呂はどうしたって？入ったよ、上のスツキリ&サツパリでなんとなく分かるだろ？

…なんだよ、入浴描写を書けっただか？そんな物書いたってしかたねーだろ。しかも転生仕立てのシヨタ野郎何かの入浴描写をか？…需要は有るかも？無いね、例え有ったとしても、そうゆう人用には作られて無いんだな。すまねえーなシヨタコンども。

「ゲフツ……あゝ、食った食った。」

取り敢えず朝食は終了。どれくらい食ったか？昨日寝る前に炊いておいた炊飯器の中身が空っぽだ。因みにおかずは、たらこ味のフリカケだけだ。

おかずになりそうな物は、昨日ベリアルとお互いの事について話した時に、全て食ってしまった。…育ち盛りなんだよ、体質の成もあるがな。

取り敢えず、使った食器等をかたずけて、…つかマジで背が低いと不便だ。何をするにしても、余計な手間が掛かる。食器洗いにしたって椅子の上に立ってやっていたし、電気を点けたり消したりするのにもいちいち跳躍しなければならない。非常に不便だ。まあ取り敢えず自分の部屋に一度戻る。…のでは無く、向かうはかつて弟が使っていた部屋。

今更だが俺の弟が死んだのは今の俺と同じ位の年だった。だから着れる服が一着位は有るかもしれない。

…だがしかし、俺は失念していた。

「……無い…な。」

無かった。キレイサッパリ無くなっていた。

…そういえば、葬式の後に、俺のものと必要性のあるもの以外の荷物は処分した気がする。

最後の希望は断たれた…。そんな事を思いながらも、弟が使ってい

た部屋の、押し入れの中を眺めていたら、ソレを見つけた。

「…浴衣…？」

浴衣が有った。それも、真新しく、一度も着ていないようだ。…思い出した、これは弟にあげた誕生日プレゼントだ。あげたのは良かったが、まだその時は浴衣が大き過ぎて、ちゃんと着れなかった。だから着れるようになるまでは仕舞って置く…と言っていた。

俺はそれを手に取り、今まで着ていたブカブカのシャツを脱ぎ、浴衣に袖を通す。

ピツタシだった、まるで俺が着る事になるのが分かって居たかの用に。

「……ッ！……」

気が付いたら左目から涙が出ていた。

別に悲しい訳でも無い、感傷に浸っている訳でも無い。…ただ、俺にはこういう事がたまに起こる。

別に何も思っただけなのに、左目は涙を流す。…まるで、俺の無くしてしまった物を語るかの用に。…かたや右目は、何も流さない、まるで今の俺を体現しているかの用に。

誰かが言っていた…

—自分の周りの物事に、興味を無くすと言うことは、感情を無くす事と同義だよ？—と。

「…どうでもいいよ。」

そう呟き、俺は弟の部屋だった場所から出る。向かう場所は今度こそ自分の部屋だ。

自分の部屋に着くとほぼ同時に、ベリアルが起きたらしく俺に話しかけて来た。

『なあ、何処か行こうぜ？室内ばかりじゃ飽きてきたっつーの。』

どうやら、部屋に着く以前に起きていたらしい。

っーか…

「起きてんなら声の一つも掛けるよ。」

『へっ？今かけたじゃん。ダメかよ？』

相変わらず、むかつく野郎だな。まあ良いか、そんな事よりも今は買い物に行く為の、準備のほうが大切だ。

取り敢えず財布とケータイを小さめのリュックサックに入れて背負う。…浴衣にリュックサックは余り逢わない気がするが、この際気にしない。まあこれで準備は万端だ。

「さてと、行きますか。」

『何処にだ？』

「何処かは、街に出てから決める。あと、序でに言っと、買い物に行く。」

『買い物？何を買ったよ？』

「着る物だ。あとは食料だな。冷蔵庫の中に、何も無いんだよ。つかオマエさ、外に出る時は、話し掛けんなよ？変人扱い去れるのヤ

「ダからな。」

『オイラも自分のマスターが変人扱いは、流石にヤダな。…と言うことで、解決案がオイラにはある。』

「だから、黙ってれば良いだろ?」

『甘いな、オイラ達には口を使わなくても会話する術がある。…それは念話だぜ。』

「…あつ。」

そう言えば、そんな事言ってたな。確か魔力を用いた無線みたいなモンだったけ?

…たしか、

(「…こうか?」)

(『ばつちりダゼ、流石マスター!』)

(「さて、そろそろ行くぞ。」)

(『了解デイ!』)

ベリアルと話しながらも、準備し終え、玄関に向かう。

履く靴は下駄だ、浴衣とセットになって押し入れにしまってた有った物だ。靴についても、履ける物が無かったなので、丁度良かった。さて、靴も履いて準備万端となったので、玄関のドアノブに手をかける…

「ガチャリ…」

玄関のドアを開けると、

「何処だ、ここは…」

知らない町並みが、俺を待っていた。

ところ変わり、今俺達は図書館に居る。知らない土地に迷いに迷った挙げ句、偶々見つけたのではいった。つか此処まで来るのがウザかった。道行く人々が俺に奇異の視線を向けて来た。さらに極めつけは、明らかに尋常じゃない雰囲気醸し出す青年だった。あの青年のだす雰囲気周りの人達が、一線退いていたほどだ。正直に言わせて貰うと、あの青年はかなり危険だった、主に精神的な意味合いで。つか何故に帯刀してる？上手く隠しては居るが、二本かな？まあ、俺には関係ないし、何よりも雰囲気が気に食わないから、他の人達とは違って、その青年の真横を普通に通り過ぎた。と、鼻で笑いながら通り過ぎてやった。あの時に、驚いた眼で俺を見ていたが、俺は何かしたか？

取り敢えず図書館での目的は、この見知らぬ土地の地理の把握や、名称や地名の確認だな。地形、もとい地図等の覚え難い物は、ベリアルに記録を頼んだ。つかデバイスって便利だ。因みに此処は海鳴市、と言つらしい。

そんな訳で、必要な情報を手に入れた俺達は図書館を後にして、次の目的地に向かう。

次の目的地は市役所。理由は俺の戸籍の確認だ。

…と、行きたかったが、予定変更をして、今はとある喫茶店でランチタイムとしゃれこんで居る。

ベリアルの念話による案内を頼りに、市役所へ向かっていた途中で見つけた店だ。丁度お昼時で、美味しそうな匂いに釣られ、入店してしまった。確か名前は…翠屋だったと思う。

取り敢えず注文を済ませ、注文した料理が来るのを待つ。待っている間、店を観察していたが、まあ混んでるよ。てか店員も客も女性が多い。さらに、妙に俺が浮いている。仕方ないだろう、まさか小学生にも満たない子供が、一人で喫茶店に食事しに来ているなどわ。客のなかには俺の事を珍しがって、ケータイのカメラで写真を撮ろうとする輩まで、出てきた。まあ写真を撮ろうとしても、俺は店の一番端のテーブルに、他の客に背を向ける形で席に着いているし…背も低いから、撮ったとしても、殆ど写らないだろう。

まあそんな事を思っていたら、注文した時とは違う、女性店員が注文した料理を持ってきてくれた。が、なんと言うか、その女性店員が妙に若い。俺の買ってな憶測だと中学生位かな？まあそんな事どうでもいいので、その女性店員に礼を言っただけ料理を食べ始める。

「…うまいな…」

俺の正直な感想だ。ここ最近、心の底から美味しいと思える物を、食った覚えが無かったので、ちょっと驚いた。そのあとは料理を黙々と平らげていく。

（『…そんなに美味しいのか？』）

ベリアルが急に、念話で質問してきた。俺の食べている料理に、興味でも湧いたのだろうか。

（「美味しいな。つか美味しいと思える料理は、ホントに久しぶりだな。」）

（『そこまでなのか？…オイラにも口があれば食べてみたいな…』）
何を奇妙な事を言いだすんだ、このデバイスは。オマエに口が付いていたら絶対に捨てるから。

（『…なあマスター、少しその料理を調べても良いか？』）
更に奇妙な事を言い出しやがった。つか料理調べてどうすんだよ。まあ…

（『調べる位なら、好きにしろ。…つつても、俺は食べるのを、止める気はないがな。』）

そう念話でベリアルに伝えながらも、さっきから口と手は止めない。

（『じゃあ好きにさせてもらっぜ』』）

そう告げるとベリアルは点滅しだして、念話は途絶えた。
ホントに調べているらしいな。

それから数十分後、料理を食べ終えた俺は会計を済ませて、喫茶店を出る。

その後は、当初の目的地の市役所に向かい、戸籍を確認した。
因みにベリアルは料理の解析に満足したらしく、機嫌良く案内をしてくれた。

市役所で調べて分かったのは、まず俺の現在の年齢、…5歳に間違いないらしい。次に確認したのは家族の事だ。これに付いては、まあ俺意外の全員が死亡していた。これは転生する前と変わらないのでどうでもいい。

あと、名前などは変わっていなかった。この事にベリアルは…

（『つまんね。』）

とか愚痴をこぼしやがったので、買う物に万力が追加された。

市役所での用事は終了したので、次は銀行だ。理由はまず、俺の財布の中に、金があまり入ってなかったからだ。どれくらいかと言うと3643円しか、入ってなかった。まあさっき喫茶店で食事をしたのが、ちよつとな。

他にも理由はある。それは金が下ろせるかどうかだ。金が下ろせなかったら？…多分大丈夫さ、今更だがあのジャージ着たかなりム力つく自称神様さんがなんか言ってたたる？…ホントに大丈夫か？

取り敢えず銀行に到着した。今更だが、来る途中で見つけたコンビニのATMで、下ろせば良かった気がする。

まあ、今日は地理の把握も兼ねての買い物だから、どうでもいいか。

結果としては、金は下ろせた…が、残高に問題があった。

…多すぎる。いくら何でも多すぎる！ベリアルなんて…

（『…マッ…マスター、金持ち過ぎだぜ！？なにその残高！？何処の御偉いさん！？つか御偉いさんでもそんなに金持ちじゃないぜ！

？。』）

何て念話で騒いでたくらいだ。

…敢えて言わせて貰おう、俺の残高を。

（「……１００兆って、…国が動かせるな。」）

……無駄だ。こんなに金持っても使い道なんて無いし。つかあの自称神様さんは何がしたいんだよ。意味ないだろ？…使う？使っちゃう…？

（「…ベリアル。」）

（『なんだよ、金持ちマスター。』）

（「…魔法訓練用に島を買うか？」）（『良いね、凄く金持ちらしいぜ』どうせなら買った島にでっかい城でも建てようぜ！』）
（「それも良いな。考えとくか。」）

つと、言うことで俺は今、実質億万長者ならぬ兆万長者になった。

>とある公園<

「…流石に買いすぎたか？」

今俺は、買い物終わり、公園のベンチで休憩している。

俺の両脇には、かなりの量が詰められた買い物袋が、四つほどある。

中身は一つは衣類で、他の三つの袋の中身は全部食べ物だ。
つか買物中はホントに疲れた。いろんな人がじろじろと此方を見
てくるし、あとは店員が俺がからかっているとか勘違いして、今日行
った店全てで迷子扱いを去れそうになった。まあ札束（なんとなく
金下して作ってみた）を見せたら態度を改めて、接客してくれた。
そんな訳で今は疲れて休憩中だ。

公園には俺達以外は誰も居ない。…と、言い切りたかったが、もう
一人だけいる。俺の座っているベンチの前方20メートル位の場所
にある、ブランコに座っている少女、いや少女がいた。

つか少女の雰囲気はかなり暗い、見ている此方の気が滅入るほどだ。
普通あんぐらいの子供は、無邪気に笑って居るもんだろ？なのにさ、
あの少女ときたら暗い顔なんてしやがって。ム力つくだよ、そうゆ
うのって、ちょっと文句でも言ってやるか。

> 暗い少女視点<

私は良い子にしてなきゃダメなの。迷惑を掛けちゃダメなの。

お父さんはお仕事の事故で入院しているの。

お母さんはお店のお仕事で忙しくて、お姉ちゃんは、学校を休んで
お母さんの手伝いをしているの。

…お兄ちゃんはお父さんにはわからないけど、スゴクコワくて、どうしていいか

わからないの。

だからなのは良い子にしてなきゃダメなの。

そんな事を考えていたら、急に知らない人に話し掛けられました。

「…ちょっと良いか？」

「…ふえ？」

いきなり声を掛けられたので、変な声が出てしまいました。

「…ふえ？じゃねえよ、ちょっと良いかって聞いたんだよ。…少し話しをしたいだけだ。」

「…ええつと、話して？」

私に話し掛けて来た人は、髪の毛が灰色で、目が赤色っぽい不思議な人だったの。

「まあ、話してのは、文句を言いきた。」

「ふええ？ええつと文句って…？」

また変な声がでちゃったの。でもこの人は、なのはにどんな文句があるんだろう？…なのはは良い子にしてなきゃダメなのに。

「ハア、取り敢えず言わせて貰うぞ。……ガキのクセに何暗い顔

してんだよ！こちとら色々あつて疲れてんだよ！…なのにそんな暗い顔した奴がにいたら此方の気も参っちまうだろが！せめて泣くか笑うかのどちらかにしろ！…ああースッキリしたー。」

私はいきなり怒鳴られました。目の前の男の子は怒っていたみたいなの。

怒られたら良い子じゃないの…。

良い子にしてなきゃなのはダメなのに、怒られたの…。

良い子にならなきゃ、なのは良い子でいなきゃダメなのに…。

「…！」

そう思ったら、涙が溢れて来ました。

>七詩虚視点<

「ああースッキリしたー。」

取り敢えず言いたい事を言ってスッキリした。まあ、用はすんだし、帰ろ。

そう思ったら急に暗い顔をしていた幼女が、泣き出しやがった。

「ふえ…ふええええん！なのは良い子でいなきゃダメなの！
！なのは良い子で居なきゃお父さんもお母さんお姉ちゃんもお兄
ちゃんも、みんなこまるの！！だから、だから…！！ふえええん
！！」

…ヤバイ…非常にヤバイ！

つか何で泣く？俺はそんなに酷い事言っただつもりは無いし！

（『…マスターが女の子を泣かした。いけないんだ。』）

（「ウルサイ！涙かすつもりは無かったから！つかオマエが何とか
しろ！！」）

（『なに言っただよ！マスターついに狂ったか！？まさか本気が
よ！？じょうだんズ「あとはたのんだ！」じゃない、ってギャー！
マジかよ！！』）

マジでたのんだぜベリアル！俺に虐めっ子のラベルを貼られるのを
阻止してくれ！

>ベリアル視点<

オイラは今、泣きわめく女の子の足下に落とされた。

つかマジかよ！？本当に投げやがった！オイラにどうしろと！？…
とっ取り敢えず女の子に泣き止んで貰わなきゃ、オイラに未来は無い！！

『…ハッ、ハロー？』

「ふえええええん！！」

駄目だ、どうしよう…。聴こえて無いみたいだ。つかマスターはどうしてる？…

（『マスター、無理です！』）

（「無理じゃない、頑張れ。あと5分以内に泣き止んで貰えなければ…分かったなベリアル？じゃっ、そう言う事で、俺は荷物を確認してくる！」）

逃げた、逃げやがった！

チクショウ、こうなったらイジでも女の子に泣き止んで貰うぜ！

> 七詩虚視点 <

約5分後、取り敢えず少女は泣き止んでくれた。ナイスだベリアル！まあ、それは良かったが、結果としてベリアルの事がばれた。つか俺が原因だが。

ベリアルの事がばれたと言っても、喋るペンダント、程度にしか思われてないみたいだ。…ヒヤヒヤしたぜ。

そして今現在、少女の話を聞いている。ベリアルが聞いてやれとウルサイからだ。

少女曰く、父が事故で怪我し、今は入院中らしい。更に母は喫茶店の仕事で忙しいらしく、姉もその手伝いで手が離せないらしい。更には、兄は何をしているか分からないが、怖くて近寄れない…。実質この少女は独りぼっちらしい。

まあ泣かしてしまった負い目も感じ、最後まで聴いたが…。つまり、聴いてて暇だった。つかオマエの兄は何をしてんの？

まあそんなこんなで、今少女は、ブランコに座ってジュース（俺が買って来た）を飲んでいる。

俺も、隣のブランコに座ってジュースを飲んでいる。ベリアルは一時的に少女が持っている。けっこう気に入られたらしく、たまに少女との話し声も聞こえる。

しばらくしたら、少女がいきなり話し掛けて来た。

「…私、高町なのはって言うの。あなたの名前は？」

「……」

は？わけわからん。何でいきなり自己紹介なんてすんの？

俺には少女改め、高町なのはが不思議に思う。

「…あの、名前…教えてくれないの？」

「教えなきゃダメかよ？つか名前なんてどうでも良いだろ。もう会わないだろうし。」多分だけど。つか会ったって意味無いし。

「……ダメなの？…次に会う事がなきゃ、名前教えてくれないの？」

…その涙目やめれ！クソ、なんでこんな奴に名前なんて教えなきゃなんねえーの？

『良いじゃねーかよ、名前くらい教えたって。あと、オイラ的には教えて損は無いと思うぜ。』

なんで？損も得も無いだろ。

「…どう言う事だよ？」

『高町なのはは、昼間入った…翠屋やだったかな？その喫茶店の店長さんの娘らしいぜ。』

…どんな偶然だよ。いや、これはきつと必然だったんだな。あの喫茶店の料理は、かなり美味かったからな。そいえば、まだデザートは食べてなかったな。

…仕方ない、美味しい料理とデザートのためだ。自分達の娘を虐めた男の子として、店を出入り禁止に去れたらたまったもんじゃないかな。

「…虚…」

「…ふえ？」

「ふえ？、じゃねえよ、虚だって言っただろ。七詩虚。これが俺の名前だ。」

愚図だなこいつ、もう少しシャキツとしろよ。

「…虚くん？」

いきなり下の名前で呼びやがったよコイツ。まあ、そんな事どうでもいいけどな。

「……なんだよ。」

「何でもない。呼んでみただけなの、ニヤハハハハ」

はいでたよ、俺的ウザイ言葉トップ10には入るわそれ。いちいち呼ばなく良いから。

「…怒ってるの？…」

「…気にするな。…所でオマエさ、帰らなくて良いのかよ？良い子は5時まで家に帰らなくちゃいけないんだぜ？知ってた？」

因みに時間は4時33分だ。まあコイツの家が翠屋の近くなら、走れば5時には間に合うだろ。

…俺？良い子じゃないから何時でも良いんだよ。

「ふえ！？どうしよう、はやく帰らなきゃなの！？…はい、ベリアルさん返すね。…じゃあね虚くん！」

そう言い残して高町なのは去って……行けなかった。
「テッテッテッテッ…ズテン！」

転んだな。しかも芸人顔負けの転び形だった。
足下に何か落ちていた訳でもないだろうに。

「…帰るか。」

(『ひでえ、見て見ぬふりかよ。助けてあげようぜ?』)

ええ。めんどくさい。

(「…ほつとけよ、俺は疲れたから早く帰りたいん」「ふえええん!
!」…ああもう!」)

勝手にしやがれ。

俺は荷物を持ったまま、転んだ高町なのはの所に行く。

「…大丈夫かよ?」

「ふえ?…なんで?」

コイツ、声を掛けたらケロッとしてやがった。…さっきのはわざとですか?つかコイツ、天然さん?それとも狙ってやってる?

「…大丈夫かって聞いたんだよ。」

「…うん、少し擦りむいただけだから大丈夫。…ッ！」

はい痛いね。つか大丈夫そうに見えないね。痛くて上手く立ててないし。

「…ハアァゝ。仕方ねえな。ベリアル、治療魔法ってやつ出来るか？」

『出来るっちゃ出来るが…今は無理だな。オイラはまだマスターと正式な管理者登録をしてないし。あと、今登録しても治療魔法ってのはそんな簡単じゃないんだなこれが。初心者に出来る訳がない。…そう言う事で無理だ。』

使えねゝな。

「…仕方ねゝな。ベリアル、翠屋までの道案内たのんだぞ。」

そう言いながら俺は手に持っていた荷物を全部近くのベンチに置き、高町なのはの前に背を向けてしゃがむ。

「…乗れ。」

「…ふえ？」

それ何回目だよ。いい加減聴き飽きたっつの。

「…ハアァゝ。乗れって言ったんだよ、この愚図。」

そう言いながら俺は高町なのはを…めんどくさいから高町でいいか、まあ高町を背負う。

「ふえええ！？うつ…虚くん！？なにしてるの！？」

なにつて、見りや分かるだろ？おんぶつてやつだよ。

「…喋ると舌かむぞ。」

「ふえ！？舌かむつて、どうッ！」

ああゝあ、言わんこっちゃない。絶対に噛んだな、舌。

「だから言っただろ？舌かむぞつて。」

走りながらも息切れ一つ起こさず会話を続ける。

道はベリアルに、最短距離で翠屋に着ける道を、念話で教えてもらっているから間違えてない……筈だ。

> 高町なのは視点<

今私は虚くんにおんぶをしてもらっています。

虚くんはたぶんだけど、お店に向かってくれているんだと思います。

いきなり声を掛けてきたと思ったら、急に怒鳴りだして。

かと思つたら、ベリアルさんと一緒になのはのお話を聞いてくれて。そして、今はなのはの事をおぶってくれて。

すごく不思議な人です。

今は舌ベロが痛くて上手く喋れないけど、お店に着いたら、ちゃんとお礼をしたいの。

「…ついたぞ、ここで良かったよな？つか間違えて居てもここに置いてくぞ。」

なのはがいろいろ考えている間に、もうお店に着いたみたいです。

「…カランカラン」

「いらつしゃいませ。…って、なのはじゃない。ッ！どうしたのそのゲガ!？」

お店に入ると、お姉ちゃんが駆け付けて来てくれました。

「ニヤハハ、転んじやたの。ごめんなさい…。」

お姉ちゃんに心配かけちゃったの。

「…どうしたの美由紀、なのは、どうしたのそのゲガ!？」

「お母さん、なのはは大丈夫だよ。それよりゲガしてごめんなさい

…。」
お母さんも凄く心配しています。でも大丈夫です、少し痛いけど我慢できるの。

>七詩虚視点<

取り敢えず翠屋に着いたは良いが…

(『…マスター、完全に空気だな?』)

言うなベリアル、分かってる…。

暫くは高町と高町家族の会話を聴いていた。…つか、高町を背負っているのに、何故俺に気付かない? どんだけ…。

まあ、いつまでも無視されているのは気に食わないから、声を掛けてみた。

「…すいませ〜ん、いつまでも無視し続けないで下さ〜い。つか、高町はいつまで俺に乗ってるつもりだ?」

「…ええ〜と、なのは、その子はだれ? 友達かな?」

メガネを掛けた女性…確か昼に飯食いに入った時に、料理を持って来てくれた人だったと思う。

「えええと、この子は七詩虚くん！さっき公園で会ったの！」

「へえー、…ん？あつ！確かキミ、昼に店に来たでしょ！？」

「はい、確かに来ましたね。」

覚えてくれていたようだ。まあこんな髪色してれば、嫌でも忘れられないか…。

取り敢えず高町を近くの席に降ろした。…いつまでも背負ってられるかよ。

「つと。んじゃ俺は帰るぜ。お邪魔しました。」

公園に荷物置きっぱだしな。

「あつ！ちよつとまつ「カランカラン」…行っちゃった…。」

取り敢えず翠屋を出て向かう先は、さっきの公園だ。荷物を置きっぱなしにしてある。正直そのまま家に帰ろうかなとも考えたが、まあさすがに止めた。

「…ああ、メンドくさいなあ。」

公園に向かいながら一人愚痴る。

（『そんなに面倒ならオイラがさっきの公園に転送してやるうか？』
）

（「ハアア？オマエさっき今は魔法はまだ使えないって言ったばかりだろうが。」）

何を言ってやがんだコイツは。

（『まあ言ったな。だけど、使える魔法が一つも無い、なんて一言も言っていないぜ。』）

…コイツ、マジでうざいな。つかそれ…

（「ハアァ、今更かよ。つか人前ですと目立つから却下だな。」

）転送魔法ってベリアルが俺の部屋に来たヤツだろ？いくら何でも目立ち過ぎだろ。

（『…つまんねえーの。』）

つまんなくて悪かったな。

公園に着いたら、ちゃんと荷物はあった。荒らされた様子も無く、全部あった。

公園で荷物を回収したらすぐに家帰った。

今日は無駄に疲れた。予想外のアクシデントがあったせいだ。

高町なのは。あいつにさえ会わなければ、ここまで疲れなかっただろうな。

正直、俺は高町が好きに慣れない。理由はわからないが…。ただ、アイツを見ると、何故かイライラが収まらない。

まあ、そんな事…

「…どうでもいいか…。」

『どうした？』

「なんでもない、それよりもだ。準備は出来たのかよ？」

…なんの準備かって？そりゃ急に…

『んっ？とづくに終わってるぜ？早く”管理者登録”しちまおうぜ。』

「そうかよ。んじゃ始めるとしますか。」

”管理者登録”をする事になったんだよ。家帰ったら、突然ベリアルがしてくれとせがんできたからだ。

なんだか今までは仮登録で、殆どの魔法は使えないらしい。俺としては仮のままでも良い気がしたが、ベリアルにとっては大事な問題らしい。だから夕食や風呂の後に、面倒だがする事になった。

…早く済ませて寝たい。

『それじゃあ、始めるぞ。…つってもやる事はその時になれば分かるから安心してくれ。』

「あつそ、なら安心だな。それなら一々難しい事考えなくてすむ。」

『そうかよ、じゃあ気を取り直して…。』

ベリアルが言葉を切ったと同時に、俺とベリアルを中心に魔方阵が広がっていく。それと同時に辺りの空気が変わった。

次の瞬間、俺の頭の中にある言葉が流れ込んで来た。

そして、俺はその言葉を口にしていた。

- 我、神の定めた終焉より生まれし… -

「我、神の定めた終焉より生まれし…」

・其は、虚心が奏でし虚しき唄… -

「其は、虚心が奏でし虚しき唄…」

・そして、今求めるは我の虚心を満たすモノ。 -

「そして、今求めるは我の虚心を満たすモノ。」

言い終わると同時に、俺の中の何かが吹き出してきた。

「ッ！なんだよコレ!？」

分かるのは、濃密な”力”が俺の中に留まる事が出来ずに吹き出している事だけだ。

『マスター、オイラの名前を呼んでください。』

「?ベリアル…。これで良いのか?」

『管理者登録を完了しました。今をもってベリアルは、マスターの矛となり盾となり鎧となりて、共に闘いましょう。』

「…終わった?」

『ハアア、せっかくオイラがかつこ良い事言ったのに…。』

「うるさい、そんな事より本当に終わったのかよ。」

『ん?ただだぜ。次に騎士甲冑のデザインを決めようぜ。』

「ああ、たしか戦闘用の服みたいなモノだったっけ?」

『まあそんなもんだ。さあ自分の騎士甲冑をイメージしてくれ。後はオイラがやるからさ。』

俺が思い描く戦闘用の服か…。

…よし、これだな。

『決まったな?んじゃセットアップって言って見てくれ。』

「セットアップ。」

そう言った瞬間に俺は一瞬だけ光に包まれた。
光が収まると服が変わっていた。

「…悪くない。それとベリアル、その姿がオマエの武器としての姿か…。騎士なんて言うから剣か槍でも出てくるかと思ってみたが、なかなか使い勝手が良さそうだな。」

『フッフッフ、当たり前だぜ。オイラw「ふあああ、眠い…。」
ハアア。わかったよ、今日はここまでで良いか。あとは好きにしてくれ。おつかれ。』

また光に包まれて、次の瞬間に俺は元の服に戻っていた。
そしてそのままベッドに入る。今の管理者登録で、更に疲れた。…
俺もう限界…

「…Z Z Z Z Z Z。」

俺は深い眠りについたら、これから起こる事に、若干の好奇心をいだきながら。

第5話／疲れる1日…。（後書き）

御覧頂き誠に有り難う御座いました。

第6話／…旅行に行くか。（前書き）

今回でエピソードみたいなのは終了します。

次回からやつと無印編にはいります。

因みに今回は短いです。すいません。 m (——) m

出来るだけ楽しんで下さい。

第6話／…旅行に行くか。

今日は朝からうるさかった。

昨日は疲れたが、今日も疲れそうだ。

「♪♪♪♪♪」

『マスター、ケータイ鳴ってるぜ。』

俺のケータイから着信メロディが流れてきた。一体誰だ？この世界に俺のケータイの番号を知っているヤツはベリアル以外、いない筈だ。…つか俺のケータイは圏外だった筈だが…。

「♪♪♪♪ピッ…」

取り敢えず着信に出てみた。

「…誰だよ。」

…なんかスゲー嫌な予感がする。

「「おっす！儂じゃよ♪久しぶり」ピッ…」「…」」

…ハア…。

今のは幻聴だ。うん、それ以外有り得ん。つか圏外なのに繋がるわけ無いだろ。

「♪♪♪♪♪」

……。

『マスター。もしかしてれいの？』

「……ああ。」

絶対に出てはいけない気がする。つか何が有っても絶対に出てやらないし。

「……ピッ……」

「……なっ！」

何だよそれ！？

「「フッフッフ、出なければそのまま事が収まるとでも思ったか？残念だったな、儂は神様じゃ。携帯電話の遠隔操作何て朝飯前じやよ」」

「……チッ！……んで、何の用だよ。さつさと用件だけ伝えて二度と俺に構うな。」

俺はもう諦めている。このダメ神様さんに常識的な会話が通用しない事を。まあ、俺が面倒なだけってのもあるがな。

「「ハァ」。それが神様に対する会話のしかたか？まあ、別に構わんがな。さてお主に態々連絡をとったのは……聞いて驚くなよ？」」

……何だっただよ。早くしてほしいんだけど。……腹へったな。

「「…ついに、マル秘サービスの内容の公開じゃー！」」

…ハァ…。取り敢えず朝飯でも食いに台所行くか。昨日買ったインスタント食品が大量にあるし。

ああ、面倒だがケータイも持ってたか。後から文句言つたためだけに電話されるとウザイし。

「「フッフッフ、驚いたろ？でわ、早速マル秘サービスの発表といこうかの。」」

何か一人で盛り上がってるな。

あつ、ベリアルを忘れるところだった。忘れると後々五月蠅そうだ。

俺が台所で朝食の支度（全部インスタント&レトルト）をしている途中もクソ神様さんは喋り続けていた。…正直に言おう。聞くのメンドイ、つかワケわからん、ナニがマル秘サービスだよ、クソ神様さん死んじゃえ。……神様さんって死ぬのか？

朝食の支度が終わると同時にウザ神様さんは用が済んだらしく、ケータイからは声が聞こえなくなっていた。

朝食を取りながら、ベリアルにファッキン神様が言っていたマル秘サービスの内容を簡単に説明してもらった。

曰く、俺は死なないらしい。

いや少し違うな、俺は寿命までは死なないらしい。ぶっちゃけ迷惑だ。因みに寿命は20歳までらしい。やたらと短い気がするが、俺

みたいな体質だと寧ろ長生きらしい。…まあどうでもいいか。

曰く、ベリアルは勝手にグレードアップされたらしい。

なんか絶対に壊れないらしいし、新しくミッド式の魔法も使えるようになったみたいだし、他にも機能が追加されたらしい。…俺には必要性が理解できない。

曰く、俺の魔力は減らないらしい。つまり、実質無限らしい。…なんかせこい気がする。

曰く、入学する学校は既に決まっているらしく、手続も済んでいるらしい。…大迷惑だ、つかマル秘サービスでも何でもないだろ。

まあ、取り敢えずこんなもんか。他にもあるが説明メンドイ。

ベリアルと話をしながら朝食を済ませた俺は一度自室に戻り、ある準備をする。何の為の準備かと言うと、ぶっちゃけ旅行に行くためだ。しかも、無期限の世界旅行に行つて来ます！

なんで急に旅行なんて行く事にしたのかと言うと、朝食中にベリアルが『マスターが以前暮らしていた世界と、今居るこの世界とでは何か違いってあるのか？』なんて言い出したと思ったら、次には『ずっと同じ場所に留まるとか性にあわね〜。どっか遊び行こうぜ〜。』とまで言い出すしまつ。まあそこで俺が「じゃあ旅行にでも行くかよ？そうすれば世界の違い何てすぐに分かるし、同じ場所に留まる事なんて殆んどないだろ？」なんて言つてなけりゃこんな事には

ならなかったらう。

さて、旅行の準備は整った。のは良いが、どうやって旅行にいく？予約すらしていなく、あてすらも一切無いな…。マジでどうしようかな。

『なあマスター、旅行にはどうやって行くんだ？なんなら転移魔法で行くか？』

…ナイスアイデアだぜベリアル。だが…

「…ああ、そりゃ駄目だ。転移魔法で行ったら不法入国になるだろ。」
捕まるのメンドイ。でも今から予約いれるのもメンドイし…。

「…ハア、まあ見つからなきゃ良いか。つか見つかったても変身魔法だっけか？そうゆうので顔とか分からない用にしとけば逃亡しても大丈夫そうだな。」
逃げるが勝ちつてな。

てな訳で…

「ベリアル転移魔法で旅行に行く事決定だ。今すぐに準備しろ。」

『了解だぜ！ああ…つかどの辺にする？いきなり転移しても場所が決まらないと行くに行けないぜ？』

…どうしよう？正直、考えるのめんどうだな。

「…んじゃてきとくに転移してみるか？ああ地中とか海中とか宇宙

とかは止めるよ？寿命まで死なないらしいけど絶対に苦しいから。」
マジで勘弁してくれ、転生するまえに一度だけ生き埋めにされかけた事（遊んでたら工事中の穴に落ちて、山積みになってた土が雪崩れ落ちてきた）がある。だから分かる、呼吸出来ないのはかなりキツイ！

『大丈夫！その辺の常識はあるから！んじゃてきとうに転移行きま
すか！』

ベリアルのその言葉が終わったと同時に、赤黒い光を放つ魔方陣が俺達を中心に広がっていく。なんつーか不気味だ。

「なあ…本当に大丈夫かよ？かなり不安なんだが。」
マジで不安になってきた。いや、すでに気付いている、こう言うのを人は”フラグ”と言うことに。…いや又は”死亡フラグ”だな。
死ねないけど。

そんなバカな事を考えていたら魔方陣の光が急に強くなってきた。
どうやら転移の準備が整ったらしいな。

『マスター、準備万端だぜ！いつでも行ける！』

ハァ、不安で一杯だが考えてる時間が勿体ない。…覚悟を決めるか。

「…やれ。」

俺の言葉が言い終わると、魔方陣の光は一層より強くなり、目を開

けられないほど強く成り目を閉じたと同時に、急な浮遊感が俺をおそった。

何だと思い目を開くとそこは…

「…寒いな。」

空だった。

今現在、俺はスカイダイビング中だ。…パラシュートは無いがな。つか空中に転移するなどは言っていないが、ワザとかよ。一方ベリアルは…

『ヒヤッホォー！久しぶりの空最っ高〜！』

テンションがバカ高い。

「…ハァ〜、どうするよ。」

憂鬱だ。てかこのまま落ちたら死ぬよな〜。…死なないらしいけど。痛いのがヤダな〜。ハァ〜。

俺、コレからどうなるんだ？

第6話／…旅行に行くか。（後書き）

…短いすよね。すいません。

でも次回からは無印編！
今まで以上に頑張ります！

御覧頂き、誠に有り難うございました。

第7話／…面倒だよな。(前書き)

誠に申し訳ありませんでした。

今回は上手く話が書けずに迷走してしまい、意味不明で解読不能な文章になっている気がします。

それでも頑張って投稿したので、取り敢えず読んで頂けると嬉しいです。

それでは、” 第7話／…面倒だよな。 ” …どうぞ。

第7話／…面倒だよな。

>なのは視点<

「行つて来まゝす。」

私は高町なのは。私立聖祥大附属小学校に通う小学3年生です。
今日もいつもと代わり映えのない朝です。

家を出発して最寄りのバス停でバスに乗り、友達のアリサちゃんと
すずかちゃんと学校に通います。

いつもと変わらない日常、ナニが変わった事が起きないかな、何
て思ってしまうくらいに変わらない日常。

…それが、今日で終わりを告げるなんて、この時は想像もしていま
せんでした。

すずか「なんか何時もより賑やかだね。」

私達が学校に着いたら、いつもより少し騒がしい教室が待っていました。

アリサ「どうせ転校生が来た、とかそんなんじゃないの？」

すずか「そうかな？でも本当に転校生だったら、どんな子かな？
なのはちゃんはどう思う？」

なのは「ええっと、どんな子っていわれても…。ううんと、ええ
っと。」

急に聞かれても出てこないよお。

アリサ「あつ、先生が来た。席に着いてないと怒られるわよ？」

私達が教室が賑やかな理由を考えると、担任の先生が来ました。
もう朝のホームルームの時間みたいです。

担任「…次は、皆さんに新しいお友達の紹介です。」

「ザワザワ」

朝教室が賑やかだった理由はコレだったみたいです。

担任「静かに。ええ、今から紹介する子は家の事情で長い間休学していました。だからって仲間外れにしないで、みんな仲良くしてあげてね。」

「ハァーイ」

どんな子だろう、少し楽しみかもしれません。

担任「はい、それではよろしいですね。…もう入って来て良いわよ。」

「ガラガラガラ…ピシャ」

…え？

担任「では、自己紹介をお願いします。」

虚「…七詩虚だ。別に憶えてくれなくて構わない。」

「…」

担任「…それだけ？何か他にはないかな？」

虚「…別に、特に無い。」

……何で。

なのは「……………」。「私は驚きで声が出ませんでした。それにしても、なっ…なんで虚くんがここに!？」

> 虚視点<

それにしても…ハァ、ダルいな、メンドイな、帰りてえな。

なんで俺がこの私立聖祥大附属小学校に通う事になったかつて？
…あのゲス神様さんのせいさ。

俺が旅行(?)から帰って来たのは6日前だ、旅行(?)から帰って来て3日目にこの学校から電話がきて、復学手続きがされていたらしい。

そこでバカ神様さんの事を疑うのは必然的だと思う。
休学についても同一人物の仕業だろうけどな。

俺的には学校なんて面倒だから、今日からもう一度停学するための書類なんかを貰う為に来たら、俺が使う授業の道具なんかは全て学校に用意されており、そのまま此処に連れて来られたっつーわけ。

担任「…ええっと、とっ、取り敢えず席に着きましようか。空いている席は…、あつ、あそこね。」

やっと復活した担任の教師さんに案内された席は、窓側の一番端の一番奥って言えば分かるか？

まあ、要するに一番端っこだ。

俺が案内された席に着いたら、近くの席の奴等がジロジロ見てきやがった。

ウザイからちつとばかり殺気を込めて睨らんだら、すぐに目を反らしやがった。…ダルいな。

>なのは視点／屋上<

私は今、午前の授業が終わったので、友達のアリサちゃんとずかちゃんと一緒に、学校の屋上でお弁当を食べています。

なのは「将来か」。アリサちゃんとずかちゃんはもう結構決まってるんだよね？」

将来の夢について。午前の授業で最後にやった内容です。

アリサ「私は、お父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強

して跡を継がなきゃ、くらいだけど？」

すずか「私は機械系がすきだから…、モグモグ…、工学系の専門職が良いなど、思ってるけど。」

なのは「…そっか、二人共凄いやね。」

私と違って二人は殆んど決まってるみたいです。

アリサ「でも、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

なのは「…うん、それは将来のビジョンの一つでは有るんだけど…。
…やりたい事は、何か有る気もするんだけど…。それがまだ、ハツ
キリしないんだ。…私、特技も取り柄も何も無いし…。」

…アリサちゃんやすずかちゃんみたいに、人に自慢できるぐらいの
取り柄とか無いんだよね。

アリサ「ばかちゃん!!」

「ヒュン…ペチン」

なのは「ッ!!」

私が暗い事を考えていたら、急にアリサちゃんがレモンの輪切りを
投げてきました!?

アリサ「自分からそうゆう事言うんじゃないの!!」

すずか「そうだよ、なのはちゃんにしか出来ない事、きっとあるよ
!」

…アリサちゃん、すずかちゃん…。

アリサ「だいたいアンタ、理数の成績は、このアタシより良いじゃないの！それで取り柄が無いとは、どの口が言うわけ！？」「…あれ？気付いたらアリサちゃんは私に馬乗りになっていました。しかも、頬っぺたまで引っ張ってます！？」

なのは「＃\$／．￥@？」。！＊％：&；、だつてなのは、文系苦手だし、体育も苦手だし～！&；．％＃！”％？@！～！」

頬っぺたを引っ張られてうまく喋れないよぉ～！

すずか「ふつ、二人ともダメだよ！ねえったら～！」「すずかちゃん助けて～」。

そんな事をしていたら、急に聞き慣れない声がしてきました。

虚「「モグモグ、ゴクン」美味しいな。ん？そっちのも旨そうだな。」

な・ア・す「…へえ？…」

声がした方を向くと、そこには…虚くんがいました。そんな事よりそのお弁当私の～！

虚「ん？……」「パク、モグモグモグ、ゴクン」

虚くん…、取り敢えず食べるの一旦ストップしよう？。

> 虚視点<

やっと午前の授業が終わって、特にする事がなくなった俺は校舎をうろつろしていた。

お昼休みで、他の奴等の殆んどが昼食を取っている。

俺?...今日はすぐに帰るつもりだったから、サイフしかり弁当しかり持ってきているワケ無いだろ...

まあ、朝飯は沢山食ったから、学校が終わるくらいまでなら大丈夫だろ。家に帰ってから飯はいただくとする。(『...マスター、暇だ...!』)

ベリアルは海鳴に帰って来てからずっとこの調子だ。

つい6日前までは旅行(?)していたから、なにもする事が無くて暇過ぎるらしい。

(『暇、暇だ、暇すぎる、ひままだ!』)

ウゼエ...

(「そろそろ黙れ、でないとトイレに流すぞ!」)

(『.....』)

やっと黙ったか。

それにしても…

「グウウウ…」

前言撤回！腹ペコで死ぬ！！やっぱり飯食べなきゃやってらんねえ
くって事だな。

俺が腹ペコなのを知ってか知らぬかはさておき、様々な方向から良い匂いが漂ってくる。

そして一番俺を惹き付けるのは…

「…上、か。」屋上からかなり良い匂いがする。

そこからの俺の行動は至って単純だ、屋上へ向かって全速前進。

まあ、そんなワケで今、屋上に設置されているベンチの上に置いてあった、旨そうな弁当をつまみ食いしているところだ。

「「モグモグ、ゴクン」美味しいな。ん？そっちのも美味そうだな。」

…ん？勝手に食べちゃって良いのかって？……………良いんじゃない？
俺に悪く無い、美味しい料理が悪いんだよ。

アリサ「ちよっ…ちよつとアンタ！なに勝手になのはのお弁当食べてるのよ！？」

俺が弁当をつまんでいたら、さっきまでケンカ（？）していた金髪の少女が怒鳴ってきた。

……なのは？。…はて、どこかで聞いた事ある名前だな…。

すずか「…ええっと、ダメだよ、他人のお弁当勝手に食べちゃ。」
金髪の次は紫髪の少女が話し掛けてきた。

アリス「そうよ、すずかの言う通りよ！てか、なのはもナントカ言
ってやりなさいよ！」

なのは「…ふえ？…ええっと、久しぶり虚くん。…」

虚・ア・す「…へ？…」

ええっと…

「…どちら様ですか？」

ベリアル（『マスター、そりゃないぜ。見てみる、マスターのさ
っきの言葉でなのはちゃん、今にも泣きだしそうだぜ？』）

ベリアルに言われてなのはと呼ばれている少女の方を向くと、目に
涙を溜めている姿が見えた。

「…じ、冗談だって、覚えているって。」

なのは「…本当に？」

……たぶん。

ベリアル（『マジで忘れたのかよ。仕方ない、オイラが直々に教えてやるっ』）

ウザ。…まあ仕方ないよな。

（「…アテにしてるぞ。」）

ベリアル（『さて、あの子の名前だろ？…たしか…マスターは高町って呼んでたはずだぜ』。』）

…あっ…。思い出した。

あの時の子かぁ。

「…高町だろ？」

なのは「…うん、そうだよ！！ちゃんと覚えてくれててよかった」

この後は高町達と一緒に昼休みが終わるまでの間に、改めて自己紹介をした。

アリサ・バニングスと月村すずかの事は、高町と同じく名字で呼ぶ事にした。

昼休みが終わり、残りの授業も終えて家に帰ろうとしたら、高町達が「途中まで一緒に帰ろう」と誘って来たが、丁重に御断りした。3人共すこし不服そうだったが、家の事情がある、と言ったら素直に諦めた。

> 虚視点 / P S <

学校から帰り、風呂と夕食を済ませて、ベリアルとテレビ見ながら駄弁っていたら、急にかなり大きめの魔力を感じた。
何処かを感じた事がある気がしたが…。…まあ、どうでもいいか。

第7話／…面倒だよな。(後書き)

どうでしょうか？

変な所がいつぱいあったりしましたか？

下手ですかね？

でも頑張って投稿します。

読んでいってくれて有り難うございます。 m ((m

第8話／馬鹿でバカだろ？（前書き）

文章作るのが…難しい…。

今更ながら文章力に欠ける自分が憎い。

そんな感じで作りました。

どうぞお読み下さい。

第8話／馬鹿でバカだろ？

> 虚視点 <

今日も俺はどうでもいい日常を送っている。

因みに学校は休んでいる。

なぜ？

…面倒じゃん。

つか行っても意味無くない？

そんな訳で、俺は家でだらだらライフを送っている。

主にする事と言えば、最近のベリアルに興味であるアニメ観賞や、ベリアルご指導の元での料理くらいだ。

アニメ観賞については迷惑ではないのだが…、料理についてはかなり疲れる。

理由については2つ程ある。

1つ目

ベリアル『ああー！！違う！もう少し少な目に！！…てっ！違う！それを入れるのは後5秒足ってから！』

「…ハァゝ、ウザイ。」

ベリアル『ギャー！火が強過ぎる！中火じゃなくて弱火だつて！』

「…はいはい、分かったから騒ぐな。」

ベリアル『分かってない！マスターは何も分かってない！！』

…まあ、このとおりウルサイんだよ。少し間違えそうなだけで騒ぎだすし、何よりウザイ。

2つ目

「…さて、食うか。」

ベリアル『ちよつと待った！！』

「今度は何だよ…。」

ベリアル『まだデザートを作っていないぜ！？』

「ハア…。…別に良いだろデザートぐらい…。」

ベリアル『…デザートぐらい、だと？…甘いぜマスター、これから作る予定のプリンより、100倍ぐらい甘い考えだよ。』

「…ハア、なんでデザートまで作んなきゃなんねーんだよ。」

ベリアル『…そんなもん決まっている。…食後にデザートは付き物だからだ！』

「…どうでもいいだろ（ボソ）…。」

ベリアル『どうでもよくなーい!!』

…細けーんだよ。大々さ、作るのも食べるのも俺なんだぜ？なのに何故に文句なんか言われなきゃなんねーんだよ。つかオマエは指示を出しているだけじゃねーか。

まあ、こんな所だな。

学校は休んだは良いけどさ、なんで学校より面倒なんだよ。

つかおかしいだろ？

何でデバイスが料理の指示を出してんの？その時点でかなり異常だよな？

アニメ観賞は1日15時間。

…正直言ってベリアルはヲタク化しつつある。いや、一緒になって見ている俺も、かなり危険だ。

そんなこんなで、流石にこのままでは俺が持たないとゆう訳で、久しぶりに外に出た。

…のは良いんだが、何故か最近この海鳴周辺で、活発に活動している魔力反応の4つが、俺の行きたい店の周辺で、結界を張って戦闘中と来た。

しかも、近くにロスト…ナンチャラとかゆう奴も有るっばい。

ロストナンチャラだけなら大した事は無いんだよ。…既に2つ回収済みだし（初登校、初下校中に見つけた）。

ぶっちゃけあの4つの魔力反応が問題なんだよ。…ハッキリ言って関わりたく無い。

理由？そんなもん決まってる。

迷惑だし、…面倒だから。

関わって仲間意識持たれたら迷惑だ。

関わって頼られたら迷惑だ。

関わって攻撃去れたら迷惑だ。

関わって戦う事になったら迷惑だ。

関わって巻き込まれたら迷惑だ。

…ハァ…。

今日何度目かの心のため息。

もういいや……。…帰る。

そう思い家に帰ろうとしたら……。…俺は既に結界の中だったらしい…。

ベリアル（『ドンマイ……。そのうち良い事あるさ……。』）

「ハア……。…」

もうどうでも良いよ…。

だか次の瞬間、俺の心にトドメをさすかのように、事は起きた…。

「キーン………」

やべえ……。…。

なんかやらかしてくれたみたいだ。

「……ドカーン！ー！」

突然の魔力爆発、どうやらロストナンチャラを半暴走状態にしまったらしい。

「……ベリアル、良い事無かったな。…」

ベリアル『…うん。……取り敢えず、ゴメン。それと、どうする？』

どうするって…、決まってるだろ？

「…4つ魔力反応さんには、お灸を据えなきゃなんネエーだろー！」
ベリアル『…とっ、ゆう事は？』

あゝあ？ンなもん決まっただろ。

「…ベリアル、甲冑よこせ。」

ベリアル『久しぶりにやりますか』…甲冑展開！』

俺は騎士甲冑を展開しながら、身体強化をして一気に加速する。

「バアンツー！」

速度は今出せる最高。跳躍と同時にコンクリが砕けたが…問題無し！

跳躍して約1秒。

「居やがった、馬鹿共が…」

って、あれ？何でアイツが居んの？」

…見つけたは良いが、何故か高町がいた。…しかもデバイスを持っていた。

ベリアル『なのはちゃん魔導師だったんだな。…！？アイツ、なにすん気だよ！？』

…ハァ…。さらに面倒だ。

俺が4人？（少女2人に動物二匹）の真上に着いたと同時に、金髪の少女が半暴走状態のロストナンチャラに向かってとんだ。

…そして掴みやがった。

馬鹿だな。ありゃーどうしようも無い馬鹿だ…。

金髪少女はロストナンチャラを両手で握りしめて、呟いている。

フェイト「止まれ、止まれ、止まれ！」

すぐさま俺は金髪少女の目の前に降りて一言…。

「オマエが止まれバカ！」

そう言いながら、金髪少女からロストナンチャラを奪い取る。

フェイト「えっ！？キヤア！」

アルフ「フェイト!!」

なのは「虚くん！？なんでここに!？」

高町がなんか言ってるがどうでも良い。

そんな事より今は…。

フェイト「ダメ！それは「黙れ！」ッ！」

「テメエ等がバカやってんからお灸を据えに来たんだ。黙って待ってる…すぐに終わる。」

馬鹿タレ共にそう言いながらも、ロストナンチャラの光は増し、握る手は流血している。

ベリアル（『…マスター、それどうすんの？』）

（「…どうするって？…こうすんだヨー！」

）

流石に痛いので、一度ロストナンチャラを宙にほおり投げる。

投げた瞬間に、周りから悲鳴にも似た、驚愕の声が聞こえたが気にしない。

…そして魔力を手に集中させて、ロストナンチャラの近くに跳躍。そして…。

「…いい加減、大人しくしろ！」

「バコッ！…ガンー！」

地面目掛けてブン殴った。

少しコンクリにヒビが入った程度だから、ロストナンチャラに問題は無い…と思う。

暴走も停まったみたいだし、無問題だな。

「『…』ナニしてんの！？『…』」

「は？見てたなら分かるだろ？
魔力を込めた拳で殴って、魔力ダメージを与えてロストナンチャラの暴走を停めたんだよ。」

ベリアル『…イヤイヤ、何故殴る必要があつた！？』

なのは「そうだよ！いくら何でも、殴るの他にも砲撃魔法とかもあるんだよ！？」

アルフ「そうさね、いくら魔力ダメージを与える為とはいえ、殴る必要は皆無だよ！？」

淫獣ユーノ「なのは達のゆうとうりだよ！とゆうか、殴ることでジユエルシードが更に暴走する危険性を考え無かつたんですか！？…そして僕は淫獣じゃ有りません！！」

…グチグチうるせえゝなあゝ。

良いじゃんよ、結果オーライさ！
つうーか、そんな事よりも…

「…そう言えば金髪少女、さっきから倒れてんけど…ほつといて良いのかよ？」

まあ、アレだけの魔力の塊みたいなモン（？）を触つたんだから、当たり前だよな。…アイツ、本当にバカだろ？

アルフ「フェイト！！大丈夫かい！？」

さっきまで犬（？）だった筈の女性が金髪少女に駆け寄っていく。

（「アレが使い魔って奴？」）

ベリアル（『そうだな、あの金髪少女の使い魔なんだろう？つか使い魔をつくれるって事は、中々の使い手って事だぜ？』）

「…ふうん。」

…それはそれは、今度手合わせ（？）でも殺りたいね。

俺は魔法を使ったケンカ（？）を、まだした事が無い。そろそろ試したいんだけど…。

そんな事を考えていたら、いつの間にか金髪少女と使い魔は居なくなっていた。

「…あつ…お灸を据えるの忘れてた。…ふう…まあ良いか、まだ2人？残ってるし。」

そうだよ、俺がここに来たのは、アイツ等にお灸を据える（と言う建前の八つ当たり）ために態々、騎士甲冑まで出したんだよ。

さて、等の2人はと…。

なのは「……………」。

ユーノ「……………」。

…何処か遠くの空を見ながら呆然としています…はい。

…萎えた。もういいや。

「…帰ろ…。」

高町にバレないようにその場を後にする。

帰ったら何しようかな…？

ベリアル（『マスター、夕飯は何作ろうか？』）

（「…作らない…。今日の夕飯はピザ。ットかピザー。だ。」）

ベリアル（『そうか！ピザか！そう言えばまだピザは作った事無かったもんな！！』）

……ハア…。

人の話しほとんど聞いてねえだろ？

そんな訳で、夕飯はピザを作るハメになった。

P
S

…生地を作るのムズ!!

第8話／馬鹿でバカだろ？（後書き）

このままで良いんだろうか…。

もっと本読んで勉強します…。

御覧頂き、有り難うございました。 m (— (m

第9話／KYの登場（前書き）

どうにも上手く執筆出来ない…。

そんな感じで書き終えました。

こんかいは今までの中でも、一番つまらないかもしれません。

それに駄文ですが、よろしくお願いします。

では、どうぞご覧ください。

第9話 / K Yの登場

ういゝす、七詩虚でえゝす。

現在俺の目の前で、またもやあの4人が、ロストナントカ(?)を取り込んだヘンな樹のバケモノと戦闘中だ。

…俺？

俺は近くのベンチで観戦中。

あと、まだアイツらは俺に気付いて無いらしい。

いやゝしかしまあ、高町と金髪少女は俺に恨みでもあるのかな？

俺はただ散歩序でに公園に来ただけなのに、着いた瞬間に結界に閉じ込められたし…。

…恨まれるような事したかな？

…カッ！！

少しばかり考えこんでいたら、急に強い光が、一瞬あたりを照した。

…たぶんロストナントカの封印の余波だろう。

余波はスグに治まり、回収されて無いロストナントカが宙に浮いている。

ベリアル（『…なあマスター、マジでナニもしないのかよ。』）

（「…する必要が無いだろ。」）

ベリアル（「つまんネエ」。」）

ベリアルの質問に適当に答えて、さっきのロストナントカに目を向け直す。

そこには、今にも戦闘を再開し出しそうな魔法少女が約2名。

…おいおい、アイツ等には学習能力ってのは無いのか？

暫く彼女らはその場に留まっていたが、…次の瞬間

…バツ！

二人の魔法少女は飛び出した。

…もう知るか、今回は暴走しても止めねえ！。

俺が呆れモードに入りかけたその時。

ベリアル（『マスター！転移反応だ！』）

（「…へっ？」）

KYは現れた…

クロノ「ストップだ!!」

全身を黒を基準としたバリアジャケットで覆った魔導師。

クロノ「ココでの戦闘行為は危険過ぎる!次空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか!」

…KY×2（空気読めなそうな黒いヤツ）が出てきた。

>クロノ視点<

まったくどうゆう神経していれば、ロストロギアを目の前にして戦闘行為を出来るんだ…。

「まずは2人とも武器を退くんだ!」

僕は戦闘行為を行っていた2人の魔導師に言う。

2人の魔導師は、ボクのことを警戒しながらも、大人しく地面にゆっくり降りて行く。

「このまま戦闘行為を続けるなら…!？」

地面に着くと、急にオレンジ色の魔力弾が、ボクを目掛けて飛んできた。

とつさに障壁を張り防ぐ。

攻撃してきたのは、黒い魔導師の少女の使い魔。

アルフ「フェイト、撤退するよ!離れて!」

そついうとまた魔力弾を放ってきた。

魔力弾とすれ違つように黒い魔導師の少女は、ロストログア目掛けて飛んでゆく。

「ドカーン!!」

後ろに下がり魔力弾を避けたが、黒い魔導師の少女が、ロストログアを回収しようとしていたので、魔力弾を彼女に放つ。

フェイト「…ッ!？」

魔力弾が当り、彼女は地面に落ちてゆく。

アルフ「フェイト!!」

なのは「フェイトちゃん!!」

「…！？」

彼女が地面に衝突する直前、膨大な魔力を感じ、辺りを警戒する。

彼女を使い魔が回収すると同時に、ボクは次の魔力弾の準備をする。

魔力弾を放とうとした矢先、白い魔導師の少女が、使い魔の前に立ち塞がる。

なのは「ダメ！止めて、撃たないで！！」

彼女は黒い魔導師の少女と、その使い魔を庇うように立ち塞がったせいで、使い魔は即座に逃走。
まんまと取り逃がした。

その後、ロストログアを無事回収すると、母さ…艦長から通信が入った。

リンディ「クロノ、お疲れさま。」

「すみません、片方を逃がしてしまいました。」

リンディ「ん…まっ、大丈夫よ。それでね、ちょっと事情を聞いたから、そっちの子達をアースラに案内してくれないかしら。」

「了解しました艦長。すぐに向かいます。」

リンディ「…それと。」

「わかっています。そろそろ出てきたらどうだ？」

僕は近くの林に向かって声をかける。
すると…

ガサガサ

虚「…見つかったか。」

灰色の髪をした、ジャージ姿の少年がでてきた。

> 虚視点<

「…見つかったか。」

上手く隠れたつもりだったんだけどなあ。

リンディ「アナタにも事情を聞くため、同行して貰っても構わないかしら？」

まあ、俺の答えは決まっている。

「別に、ちゃんとした客人への対応が出来るのなら、構わない。けど、お茶請けは羊羹でたみますよ。」

ちょうど羊羹が食いたい気分なんだな、これが。

クロノ「なっ…！」

リンディ「ふふ、大丈夫よ、丁度よく羊羹ならあるわ。」

…なかなか用意が良いな。

羊羹あるなら行っても良いかな？

さて、”アースラ”ねえ。

どんなもんなんだか。

まあ、どうでもいいんだけど。

第9話／KYの登場（後書き）

はあゝ、文才が欲しいです…。

ご覧いただきありがとうございます。 m (—) m

第10話／…理由、無いな。（前書き）

今回は、前回より少し長めです。

それだけです…。

どうぞご覧くださいm（——）m

第10話／…理由、無いな。

> 虚視点 <

クロノ「送っていこう。もとの場所でもいいね？」

なのは「あ…はい…。」

どうやら話しは終わったようだ。
またつく、はた迷惑な話だ。

自分で発掘したから自分で回収する。

だよ。

バカだな、凄く馬鹿だ。

そんで自分だけじゃ回収出来なくて、結果的に高町を捲き込んだわけだ。

ダッセー…。

リンディ「…すみませんけど、アナタには残って貰えるかしら？」

なのは・ユーノ・KY「えっ…？」

俺がイタチの馬鹿話に呆れていたら、ハラオウン艦長さんが急に俺に艦に残れ、と言ってきた。

そいえば俺さつきから、羊羹食ってお茶飲んただけで、話しなんて自己紹介しかしてないじゃん。

たぶん、高町達が帰ってから事情徴収でも受けるのかね？

「腹へったから、晩飯出してくれるなら考えてやっても良いかな？」

クロノ「はあ！？君はそれだけ羊羹を食べておいて、まだ腹がふくれないのか！？」

KYが俺の目の前を指で指しながら問い掛けてくる。

俺の目の前には、数十個の皿が山ずみになっていた。

「いやゝ、まあ育ち盛りだからなゝ。」
半分以上は体質のせいだが。

リンディ「まあ晩ご飯ぐらいなら構わないわ。」

「あざあゝす！」

晩飯ゲットだぜー！

「じゃっ、そうゆう訳だ、じゃあな高町。」

なのは「うん。。。」

なんだ？変なもん食ったか高町。じゃなきゃ毒でも盛られたか？

クロノ「それじゃ行くとしよう。」

KYが高町達を連れて部屋を出ていく。

リンディ「さて、アナタに残って貰った理ゆゑ「飯だ」…え？」

え?...じゃねえだろ。ボケたか？

「飯が先だ。言っただぜ？晩飯を出したら考えてやっても良い。てな。」

ちよつと違つ気もするが、言っただな？

リンディ「こちらとしては、話しを先に済ませたいのだけれど...」

少し困つたふうにゆうリンディ艦長。

知つたこちゃなないね、俺は腹がへつてんだ。

「そつちの都合なんてどうでもいい。俺は腹がへつた。」

威張つて言うことでもないがな。

リンディ「ええつと...まあ良いでしょう。」

リンディ艦長さんは言い終わるとモニターを展開して、誰かと話した。

話し方からして、わりと親しいのだろう。

話しが終わつたらしく、俺にむきなおして話し掛けてくる。

リンディ「食事については食堂でとりましょう。私たちも早めの夕飯とゆう形で一緒にさせて頂くのかしら？」

「別に構わないよ。」

今はそんなことよりも…。

（「…おい、ベリアル。」）

ベリアル（『？…どした？』）

どした？…じゃねえよ…。

（「…早く俺の体返せ…。」

）

そう、今俺は、ベリアルに体の主導権をあげ渡している。

主導権をあげ渡している。といっても、わけが分からないか…。

簡単にゆくと、俺の体の身体運動を、ベリアルが行っているんだ。

…因みにこの機能は、あの忌まわしき神様さんの仕業だ。

なんの目的があって付けたかは知らんが…、ろくな事にならない機能だとゆうことは、何となく気がつくだろう？

まあ、悪戯出来ないように、俺の承諾を得ないと機能しないが…。

ベリアル（『…もう少しだけ！』）

（「今日、何回目だ…。」）

ベリアル（「…5回目？」）

（「そうだな…5度目だ。一体いつまで俺の体で遊ぶ気だ…。オマエ、飯なんて家に帰ってからでも食えるだろうが…。」）

まったく、ベリアルに任せるとろくな事にならない。

前にも何回か今と同じように、体の主導権をあげわしたことがあるが…。

一回目は海に落ちて…。

（初めての転移魔法のとき）

二回目は火だるま…。

（魔力変換資質炎熱で焚き火を起こそうとして大火災）

三回目は落雷が直撃…

（嵐の日に飛行魔法を行使したため）

四回目は凍結…

（転移魔法で、ブリザードが吹き荒れる北極に転移したせい）

さらに…、

最近では万引き扱い…。

（店に並べてある商品を無断で開封）

まったく、ロクなめにあわない。

…と、ゆうわけで。

（「ベリアル、返せ…。」）

ベリアル（『ブウ〜！ケチッ！』）

（「黙れダメデバイス…。」）

ベリアル（『ふんっ！どうせオイラはダメデバイスですよっ！』）

（「分かったら返せよ。」）

ベリアル（『はいはい…。』）

ベリアルが言い終わると、急に体の自由が戻ってくる。

渋りながらもちゃんと返すところは、まだマシな方が…。

「……………」

「グウウ〜」

腹へったな…。

リンディ「そんなにお腹すいてるのかしら？」

俺の腹の音を聞いていたらしく、艦長さんからの問い掛け。

「…まあ、育ち盛りですから…。」

既に俺の口癖第2位にも匹敵するこの言葉で返す。

リンディ「いくら育ち盛りでも食べ過ぎね…。さてと、食堂に案内しましょうか。」

俺の返答に若干の異議をとなえた後、食堂に案内をするため席を立つハラオウン艦長さん。

…それにしても、この人いったい年いくつだ？
かなり若く見えるが…、あつ…、小皺発見。よく見ると化粧で隠している小皺が幾つかあるな…。

フム…。まあ一児の母の割には若いよな。

そんな失礼なことを考えていたら…。

リンディ「…どうしたのかしら？」

笑顔でこちらに声を掛けてきた、ハラオウン艦長さん。

…ただ、目が笑って無い…。

口元は笑っていても、目が笑って無い！！

ヤバイな…、考えていたことがバレタか？小皺を見つけたのが間違いだったとゆうのか！？。

取り敢えずここは誤魔化していくしかない…。

「…いや、なんでもないですよ…。ただハラオウン艦長さんは、一児の母なのに若くて綺麗だなんてって、思っただけですよ…。」

リンディ「あら、ありがと♪でも誉めても何もでないわよ？」

「いや、今から夕飯が出ますよ。たとえ何も出なくとも、勝手に何かしら貰いますから、ご安心して下さい。」

リンディ「…それ、何も安心、出来ないわよ…。」

かなり呆れ気味に答えるハラOWN艦長さん。
フツ…、危機は脱した。

さて、メシか…。
どれくらい食おうかな…。

>クロノ視点ノアースラ内の食堂<

ボクは今、トンデモない光景を目の当たりにしている…。

ここは正直に言わせて貰おう…。

「キミは一体どれだけ食べれば気がすむんだ!?!?」

虚「「モグモグ…ゴクン。」…さあなあ、あと3人分ぐらいじゃね?」

そして再び食事を再開する、虚と名乗った少年。

…しかしだ、なんだこの現状は!?
テーブルの上に重ねて置かれた、幾つもの皿、皿、皿、!?

コイツ、6人分は食ったぞ!?

いったいどうしたら少年の体に、これだけの量の料理が入るとゆうんだ!?

絶対に胃袋の大きさより食べている!!

その異常な食事光景に驚き半分、呆れ半分にしている局員がさっきまでは溢れていた。

写真までとる局員もいた始末だ…。

因みに母さん…艦長は苦笑いでその食事を見ている。

たまに、「……この子、胃袋どうなってるのかしら…。」なんて聞こえてくる。

ボクも同じ意見だよ。

そんな中、エイミィはとゆうと…。

エイミィ「見てみてクロノくん! ついに9人前突破だよ! 凄い! クロノくんもアレぐらい食べれば背が伸びるかもよ!」

「もう9人前も食ったのか!?! それよりも、背については余計だ!」

エイミィ「アハハ、ごめんごめん。でも本当に凄いね、どうしたらこんなに食べれるのかな?」

「それについてはボクも同じ意見だ…。」

妙にテンションが高い…。

正直ここは食事の量に引くべき所のハズだ。
なのにエイミィは真逆の反応、引くどころか逆に楽しんでいる。

虚「「…ゴクン」…ああ、食った食った。ご馳走さま。」

やっと食い終わったらしい。

とゆうかコイツ、最終的に一人で10人分も完食してるぞ!?
本当に、どんな胃袋をしてるんだ…。

リンディ「ええっと、食事も終わったことだし、部屋を移して本題に入りましょうか。」

> 虚視点<

リンディ「…何故、と聞いても良いかしら?」

「簡単な話だ…。ただ、どうでもいいだけのことだ…。」

クロノ「どうでもいいだと…! キサマ…!」

リンディ「落ち着きなさいクロノ…!」

クロノ「!?!?。失礼しました…。ですが…!!」

リンディ「わかってるわ…。虚さん、理由を聞かせて貰えないかしら…?」

理由ときたか…。困ったね、理由と言えるような理由は無いんだけど…。

ええ、と、今現在、七詩虚は艦長さん&KYとお話中です。

あつ…。間違つても”O H A N A S I”では無いからな。
…何のことだか知らんがな。

さて、話しの内容は…。ぶっちゃけ”スカウト”だ。

どうやら管理局は万年人手不足らしく、そこに俺や高町みたいな高ランクの魔力の持ち主が出てきたから、どうしても手に入れたらしい。

…艦長さんが言ったのとは、ちょっと違う気がするが…。まあ、あながち間違いでは無いだろう。…たぶん。

さてまあ理由か…。

「理由は…。…無いな。」

リンディ「ふざけないでください…!」

あゝ恐い。つか心外だ、ふざけているつもりは無い。…気がする。

「ふざけてはいないさ…。理由が無いのが理由だと、俺は伝えたいわけ。…お分かり？」

リンディ「…よく分からないわ…。」

だろうな。俺の理論が他人に通じたことなんて、ほとんど無いからな。

…意外に単純なことなんだが。

「簡単さ…、俺が管理局に入る理由が無いってだけだ。…もちろん、入らない理由も無いがな。」

リンディ「ますます意味が分からないわ…。」

クロノ「いい加減、真面目にしてくれないか…。」

ハア…。これだから普通な思考は嫌いなんだよ…。

ああ、もう帰らせて…。

「…ああ。お前らさ、理由も無いのに働くか？…って言ったらお分かりいただける？」

人はさ、物事をこなすには何かしら理由が要るんだよ…。例えば、お前らさあ…、なんで管理局に居るの？それなりの理由が有るからだろう？だが、ところがどっこい俺には無いんだよ、管理局に入る理由なんてな。…ここまで言えば分かるよな…？」

クロノ「……」

リンディ「……虚さんなりの考えがある事は、多少理解しました。

…ですが、これだけは忘れないで下さい。貴方には、人を救える”力”があるとゆうことを…」

ハア……。まだ完全に諦めないのかよ。

つか、多少かよ……！！

にしても、人を救える力ね……。

ベリアル（『マスターには似合わない言葉だな』）

失礼な！……だが。

（「俺もそう思う。」）

救うなんて、救われないヤツのゆう戯れ言だ……。

俺は救われないわけじゃ無い……。救いたいわけでも無い……。

そうゆうの……

…どうでもいいんだよ。

リンディ「では、今日のところはお開きね……。クロノ、虚さんを送ってあげて……。」

クロノ「……はい……わかりました。」

あらま、不機嫌極まりない、って感じか？

しかたないじゃねえーか、恨むなら俺から感心を奪った世界を恨め……って……。

……いや真面目にさ、俺に感心が沸けば、もしかしたら入ったかもし

れないし…。

そんなことを考えながら部屋を退出する俺。…とKY。
…一瞬忘れるところだった。

退出後は無言で歩くKYと俺。

「コツコツコツコツ…」

クロノ「……。」

無言だが、たまに睨まれる…。
…ウザイが仕方ないか。

暫く歩き続けて、来たときと同じ場につく。

「…あつ…、オマエはここまでで構わない。転移魔法なら出来るから。」

クロノ「……。」

無言で帰って行くKY…。
何故にそんなに怒ってる…。

まあ、気にせず転移魔法の準備。

（「ベリアル、家に転移出来るだろ？」）

（『出来るぞ〜。』）

（「じゃ、宜しくたのむ。」）

（『了解ですぜ！』）

途端に足下に出現する魔法陣。

そして転移。

「…暗いなおい。」

…無事に家に到着。

因みに夜になってた。

ワリと長い時間アツチにいたらしいな…。

まあどうでもいいや、寝よ…。

p s・ベリアル

オイラ的には、もうちょっとマスターの身体使って遊びたかったぜ
…。

…マスターのケチ！！

良いじゃないか、身体を動かすぐらい…。

第10話／…理由、無いな。（後書き）

たぶん今回の結果に、つまらないと思う方も居ますでしょうが、作者としては、この作品の主人公らしさが出ていた…、気がします。

どうも、ご閲覧ありがとうございましたm（――）m

番外編 / 駄弁りましょう。

祝・P・V…幾つだっけかな？

P「PANDORAです。他の作品みたいにやってみました…。」

虚「…ハア。人の真似しか出来無いかよ、駄作者が…。」

P「いやいや、人は人の真似をして成長するんだよ？真似するのは当たり前だよな？…でもまあ、真似してすいません…orz。」

虚「と、ゆうことで始めました番外編です。正直言っちゃって、どうでもいいですよ。マジで作者死ねって感じだよな。」

ベリアル「うわあ、ひっでえ言われ様だな…。」

P「…そうゆうキャラにしたつもりですからね。でも少しご機嫌斜め気味かな？」

虚「あつ、わかった？聞いてくれよ、最近さあ学校から電話かかりまっくて来てさ（全部無視）、ぶっちゃけ迷惑なんだな、これが。」

P「まあ、無断欠席したら当たり前だと思うよ…。とゆうかさ、せつかくだし、学園生活を満喫したらどうかかな？」

ベ『マスターには似合わないけどな』』

虚「ベリアルは後でドブに捨ててくからな。ドブネズミ細菌ラ
ンドだぞ、楽しみだろ？」

ベ『…すみません、マジ勘弁願います！許してください！』

虚「あつゴメンね、決定事項だからさあ。…無理だ。」

ベ『イ〜ヤア〜ダ〜！！』

P「さて、ベリアルのお仕置きが決まったので、そろそろお別れで
す。」

虚「オイ、ちょっと待て！？いつたいたなんの為の番外編だよ！？」

P「…暇潰しと、気分、かな？」

虚「ふざけるバカ野郎！！！！」

謝れ！！今すぐに謝れ！！今すぐにこの番外編を読んでくれている
方々に謝れ！！謝れバカ野郎！！」

P「どうもすみませんm（――）m。…それでわ、来週もまた観て
下さいね？ジャン、ケン、ポンツ。ウフフフフ」

虚「真面目に謝れー！！」

ベ『ドブはヤダア〜！！』

調子にのってすみません…。

m () m

次回はちゃんと執筆します。

だから見放さないでね…？

ご覧頂き、ありがとうございましたー！！

第11話／死合じゃね？（前書き）

費やした時間の割りには、たいした文字数を稼げなかった…。

毎回短くてご免なさい。m (——) m

あつ！PANDORAはその内に、リリカルなのは物の小説の第三段を投稿する予定ですので、良かったら読んで頂けると嬉しいです。因みにストーリーはStrikersからです。

設定の段階では、自分としては今までで一番満足してます♪

まあ兎も角、転生は万病の元…orz第11話、ご覧になって下さい。

第11話／死合じゃね？

「…最悪…。」

文字通り最悪だ…。

ああ、マジ最悪だよ。

例えるなら、パラシュート無しでやるスカイダイビング、ぐらい最悪な気分だ…。

いや…、ノーロープバンジー、ただし着地点が地雷原、ぐらい最悪だな…。

いやいや…、今からジャンケンして、負けたらバツゲームでライオンの入った檻で一生すごせ。ただしオマエはチョキしか出したらダメ…。ぐらい最悪かもしれない…。いやいやいや…。…今から1分後に核弾頭と正面衝突、ぐらい最悪だな…。

クソ最悪だー…。

なにがそんなに最悪かって…？

それはな…。

恭也「…準備はいいな？」

「たぶんな…。」

…分かった？分かってくれた？

…いやね、ただ今、高町家の道場で、高町の兄の恭也さんと対峙しているわけですよ…。

恭也「…構えろ…。」

殺気にも似たものを俺に放ちながら、小太刀を2本構える恭也さんです、はい…。最悪だ…。

「はいはい…。」

対して俺の構えは、人体の急所である顎と首を左腕で隠し、右手で心臓と肺を隠す構え…、構えになってない？気にするな、当たったら肉体的に辛いから、気休め程度で隠しているだけだから。…気休めにもなっていない気がするがな。

…つか俺、武器なしだよ。

どうしてこうなったかって…？

…それはな、今日の昼飯の時間まで遡る。

> 虚／昼頃<

腹がへったから翠屋に来ている虚です。

「すみません。注文をお願いします。」

桃子「はい…、あれ？学校はどうしたの？」

「休みですよ…。」

明らかな嘘ですが…、ナニカ？

桃子「ウソツキは出入り禁止にしちゃうかも…」「無断欠席しました
！！」「…フフ、冗談よ」

チツ！たちの悪い冗談だぜ、まったく。

桃子「学校行かなくて良いの？ご両親とかには言っているの？」

「今、家族は俺一人ですから問題無しです。…あつ、注文をお願いします。」

桃子「あつ、ごめんなさい…。注文をどうぞ。」

この会話の後は、普通に…、とゆうか…微妙な空気の中で昼食を取るハメになった。

「ごちそうさまでした」。

桃子「またいつでも来てね。」

高町^{なのは}が居ない時なら―

と言い残しながら翠屋から出て行く俺。

翠屋の外に出ると、一人の青年が翠屋に向かって歩いてきた…、つかソイツにぶつかった。

「ゴツン！」

体格差のせいで倒れる俺。

…痛ってえゝ！コンクリに頭ぶつけた！！

恭也「すまん！大丈夫か…、ッ！！キサマは！？」

青年がなんか言ってるが、俺は取り敢えず立って青年の横を素通りしようとしたら…。

「ガシ…！」

肩を掴まれた。…痛いですよゝ、どんだけ力込めてんだよゝ…。
恭也「…ちよつと此方に来て貰おうか…。」

そのまま引き摺られてゆく俺。

Help me！現在進行形にて拉致られてます！？…俺、ぶつかっただけだぜ？

てかこの人、どっかで会った事がある気が…。

> 虚ノ高町家道場<

まあ、そんなワケで道場に拉致られてきた俺は、青年の自己紹介（かなり短い）の後にこうして組手…いや、試合…これも違う。

ええ〜と、死合い？を始めることになりました。

因みにもう始まってます！

恭也「ハアッー！！」

「ビュン！」

「コワイコワイ…。」

恭也さんの横一閃を後ろにステップして避ける俺。

恭也「チッ！これなら…！」

「ヒュン！ヒュン！ヒュン！」

「危ねえーよバカ野郎！」

次に放たれたのは、二刀による3連撃。

一撃目は右手の小太刀からの、心臓への突き。
これは、小太刀の腹の部分を、手のひらで逸らして避けた。

二撃目は左手の小太刀からの、右脇腹への一閃。

これは後方へバックステップして避ける。…つかさ、この人殺す気満々だよな…。

三撃目は、両手二刀を首と頭部への投擲。

これはしゃがんで避けた。…ってゆうか！当たったらマジでヤバイから！

恭也さんは武器を自分から手放した…、ニヤリ（「ー」）。

反撃のチャンス！！

と、思ったら…。

「ゴッ！」

「ガハッ！」

恭也さんはいつの間にか後ろにいて、しゃがんでいた体勢の俺は、右脇腹に蹴りをまともにくらった。

そして道場の端の方まで吹き飛ぶ俺、壁にぶつかるギリギリで体勢を直して床に着地したが…。

「ッテエー！！クソ野郎が！！」

肋が逝きました。

痛ッテエー。スグに治るけどさ、マジで痛いんだよ？お分かり？

つか今さ、いつの間に俺の後ろにいた？何あれ？速すぎだろ！？…
アイツさあ、ホントに人間？実はサイヤ人なんじゃねーの？

そんなことを考えている内に、投げた小太刀を回収した恭也さんが
此方を向いてきましたよ。

恭也「…キサマ、なのはに何かあったら、こんなものじゃ済まさないからな！！」

「…??どうゆうこと?」

なんのことだよ…。つか何で高町^{なのは}に何かあったら、なんて俺に言うの？

恭也「シラをきるつもりか！！母さんから聞いたぞ！なのはが友達の手伝いをする為に、家を数日空けなきゃならないと！…しかもだ！その友達は何時ものアリサちゃんやすずかちゃんではなかったわけだ…。そうなれば残るのは、なのはの会話に最近よく出てくるキサマだけだ！！…いいか！もしなのはに大事があつてみる！！スグにキサマを殺してやるからな！！！！」

ああ…。話を聞いてて分かった事が幾つかある。

まず1つ目だ。

コイツさあ、勘違いしてるよな。

たぶん高町が言った友達は淫獣ユーノくんのことだろう。あのバカ、管理局に協力することにしたんだな…。

さて2つ目だな。

コイツ、シスコンだな…。

それも極度の…。

もう助からないな…、色々と…。

さーて、ここまで分かったら何だか物凄くハラがたつてきたぜ！！

あのバカ（高町なのは）のせいで俺はあばら骨を折られたわけだ…。
高町にこんどあつたら、ドロップキックをお見舞いしてやる！

まあそんな事よりも今、スゲー気になっている事がある。

あのシスコンが、俺に蹴りを食らわせた時だ。

ハッキリ言わせて貰うと、普通の人間での限界ギリギリの速さでもない限り、俺は反応出来る自信がある。

つと、ゆうことは…、あのシスコンは人間の限界ギリギリの速さで移動したことになる。

…あるいは、俺と同じような体質か…。…いや、それは無いな。そうだとしたら、最初から俺は反応出来ない筈だし。

…まあいい、直接本人に聞くか…。

さて、そろそろ本気でケンカ（死合）が出来そうだ。

（「ベリアル、分かってるよな…？」）

ベリアル（『…？』）

（「…邪魔するなよ。」）

（『恭也さん、死んでもオイラを恨まないでくれ…!!』）

ベリアルに邪魔するなとクギをさしておく。

コイツ、俺が殺人沙汰になりそうになると、何かとウルサイんだよな。

取り敢えずさっきのに対抗するために、魔力による身体強化を使っておくかな。

転生前よりはまだ、かなり弱いが、充分だよな…。

さあーで、ここからはブチギレて行くぜー!!

マジデ死ネ！クソ野郎ガ！！

> 恭也視点<

ん、なんだ…！

俺が話し終えたら、急に虚とゆう少年の雰囲気が変わった。それも、さっきまでとは比べ物にならない。

正直に言ってしまうと、今オレの目の前に居る少年がさっきとは別人に思えるくらいだ。

虚「…アンタ、サツキノ何ダ…？普通ジャナカタヨナ？色々ト…。

…

コイツ、”神速”に気付いたのか！？

有り得ない、まだ小学生だぞ？いや今思えば、普通の小学生なら最初の一撃で終わっていたか…。

…フツ、すこし甘く見すぎていたようだな…。

「フツ、キサマに教える義理はない…！」

少年の質問への回答は、実物で答えてあげよう…！！

俺は神速を使って、少年との距離を一気に縮ませる。

虚「…！？…マジかよ…！！」

攻撃の間合いに入ると、少年はかなり驚いている。

…が。なんだ、この違和感は？

まるで俺が誘われたかのような…。

そこまで考える頃には、少年に向かって右の小太刀を振り降ろした後だった。

だが…。

「メキ！」

「ガハッ…！」

次の瞬間に、俺は真横に吹き飛ばされていた。

「バコン!!」

「ッ!!ガフッ!!」

一瞬の浮游は終わり、地面に叩き付けられる。
スグに体制を立て直そうとするが…。

「…!!」

視界が揺れて上手く立てない。

くそ!!打ち所が悪かったか…!

それよりも…、今アイツは何をした!?

俺は確実に一撃を入れた筈だ。

手加減はしていない、手抜きもなしだ、力加減はしたが…。

だが事実、神速まで使った。

あれを避けるなど、同じ神速を使えない限り不可能に近い…。

しかも相手は小学生だぞ!?

何故だ、一体アイツは何をした!?

>ベリアル視点<

『…(ハァ)、マジで本気になっちゃったよ…。これじゃ恭也さんが何時死んでもおかしく無いぜ…。』

しかも恭也さん、地面に激突する時に頭打ちやがった。
正直ダサ過ぎたる！

しかし、まさか恭也さんも人間が無意識に掛けているリミッターを外すことが出来たなんて…。

正直驚いた…。

まあ、マスターの場合はリミッターを外す前から化け物だから、外した後がかなり恐いんだよ…。

いや、冗談抜きで！！

きつとその内…

虚「…キヒツ…」

キター！
……！！

やバイやバイやバイやバイやバイやバイやバイやバイ
やバイやバイやバイやバイやバイやバイやバイやバイ

本格的にイカれる前に、誰か早く止めて！

恭也「ハアッ！！」

オイラの願が届いたのか、どうにか立ち上がった恭也さんが、マスタ―に向かって神速の一閃を仕掛けるが……。

恭也「…噓、だ、ろ…。」

…マスターは恭也さんの一閃を、小太刀の刃を右手で掴んで止めた。
マスターのそのイカれた行動に、思わず声をあげる恭也さん。…つかオイラも正直驚いた。

そして、次の瞬間に…。

虚「キヒツ…キヒヤツ…キヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ…！」

マスターが完全にイカれた。

…つか、間に合わなかったー！！

マジで誰でも良いから！！早くマスターを止めてくれー！！

P S ・ベリアル
H e l p m e ……！！

第11話／死合じゃね？（後書き）

主人公がイカれちゃいました♪

作者は元からイカれてますが♪

また次話も見てくださいね？

ご覧に頂き、有り難うございました。
m (m

番外編／うーちゃん爆誕！！（前書き）

ええー…、なんかご免なさい！

m (——) m

いや、最新話は執筆してますよ？ただね、息抜きが必要な気がして…。

次はちゃんと本編を更新しますから、…ちょっとグロイ描写が有るけど、次は期待して下さい。

まあ、取り敢えず番外編を読んでみて下さい、文字数はかなり少ないですが…。
どうぞっ！

番外編／うーちゃん爆誕！！

虚「…おい駄作者…。」

P「はい、なんですか？」

虚「…『うーちゃん爆誕！！』って、なんだよ…。」

P「……そのままです」

虚「…殺ス！！」

P「落ち着いて、話し合いで解決しよう。」

虚「無理！！」

P「…仕方ないな。…召喚！久しぶりの登場！神様さん！！」

神「ツシャー！久しぶりにワシの登場だぞ」…え？”待つてました。”だって？フツ」そうじゃろそうじゃろ」…なんたってワシは神
S「消エ去レ糞野郎ガ―！！」…ぶげらっ！？」

P「よっ神様！盛大に吹き飛ばしますね」

虚「次はデメエだ！！」

P「アハハ」まあまあ、そんなに怒ると『女の子』に成っちゃうかもよ」

虚「ふざけるゴミ虫が!!今すぐ千切つて解体してや!」ところがギツチヨン!!「チヨイサー!」ッ!糞神があゝ!まだ生き……。ナンじゃこりゃゝ!?!」

P「ニヤニヤ!」

神「ッ!…クッ!…ブフッ!」

うーちゃん「テメエ等、これは一対どうゆうことだ…!?!」

P「見たままの意味です!」

神「そうそう!ブフッ!」

うーちゃん「つざけんな!!なんで男の俺に”オッパイ”がついてる!?!つかこの無駄に長い髪の毛はなんだよ!?!つか《うーちゃん》ってなんだよ!?!」

P「さて!うーちゃんがなんか言ってますが、さっそく設定を紹介しようと思います!」

《うーちゃん設定》

名前

うーちゃん

種族

人間・女性?

容姿

灰色長髪（膝まで伸びている）。
紅いつり目（虚と変わり無し）。
身長及び体重は、虚と変わり無し。
口リ巨乳。

以上！

「うーちゃん…なんでこんな事に…。」

P 「いやあ、ついでね♪」

神「ついね♪まあ、可愛いから良いじゃん♪ワシに感謝しても良いくらいじゃよ♪…ブッ…♪」

うーちゃん「誰が糞以下の神にお礼なんかするかよ!!」…「つかないも良くないよな!」? ……「まあ、悪いわけでもないんだが…、身体が変わっただけだし…。」

P「フン♪んじゃ、一生そのままでも良いんじゃない？」

神「おお！それは良い提案！」

うーちゃん「…あゝ、クソッ！もう、どうでもいいや…。ほんと、
どうでもいいや…。」「グウ…。」「…腹へったなあ…。」

P「はい！うーちゃんがお腹がすいたらしいので、今回はこの辺に

しときましよう。」

神「はあゝ、ワシの出番が終るのか…。…皆まで言うな！分かつて
いるぞ、ワシとのわかれが辛いんじやろ？ワシだって辛いん「ウザ
イからもう黙れよ。」グボアゝ！」

P「ロリ巨乳に蹴り飛ばされて、壁に突き刺さる神さま…。シユー
ルだね♪実に愉快だね♪」

うーちゃん「…取り敢えず終わりたいから、…この駄作者殺すから。
…もうちょい待ってる。」

P「…えっ！？ちよっ待って！？何で私が死ななきゃ「逝っちまい
な糞作者！！」ギャー！！」

ギシャツ！

ボギヤツ！！

ギユチャツ！

グチャツ！！

うーちゃん「ああゝ、スッキリした♪さてと、邪魔くさい糞どもの
処刑がすんだ事だし…。終わりますか…。まああれだ、こんな駄文
を読んでくれてありがとな…。じゃっ、またな…。」

読んでくれて本当にありがとうございます。
これからもよろしく願いいたします。

m () m ()
m () m ()

番外編／うーちゃん爆誕！！（後書き）

下らないと思ってしまいう方も、多くいるでしょうが…。
読んでいただき、本当に感謝しております。

ありがとうございました。

第12話／狂気二狂工。（前書き）

ノリで執筆したのですが…、なんか違和感バリバリになってしまいました。

自分の才能の無さが憎いwww

取り敢えず、読んでいただきたいと思います。

因みに、虚のキャラ崩壊は回避不能でした…。

第12話／狂気二狂工。

>ベリアル視点／戦闘再開<

虚「キヒヤヒヤヒヤハッ！！ギイヒヒヒ！！クラエ！！ギャハハハハ！！」

奇声とも、奇叫とも言える高笑いを上げながら、左手から恭也さんの腹に向けてストレートを見舞うマスター。

一方恭也さんの方は、右側の小太刀をマスターに封じられて居るため、一度手放し、後ろに下がるが…。

恭也「ッ！？…ガハッ！！」

吹き飛んだ。

避けた筈だ！！！！

と、恭也さんは思っ居るかも知れないが…。
甘い、甘過ぎる考えだ。

今のマスターに、常識は通用しないと思っの方が良い。

因みに今、恭也さんがくらったのは”拳圧”だ。仕組みは簡単、空気を拳で押し出したのだが、マスターが起こした拳圧は少し細工がある。マスターは恭也さんが後ろに下がる事を予測していた。だから拳を振りきる速度を”亜音速”、つまり音速の0.6〜0.7倍で振り切った。

こうする事で、空気を最大限に利用するためだ。まあ細工とも言えないけど。

つかぶつちゃけ、マスターが拳で放てる最高速度ってただけだな…。

…だが、オイラは失念していた、マスターの身体の成長速度を…。オイラが初めてマスターがイカれたのを見たのが約2年前、今日以前に見たのが約1年と半年前。

…そう、1年と半年もあれば、マスターの身体はかなり成長する。だが、マスターは身体が成長しても、精神や心と言った物は成長しない。

そして、コレからマスターが起こす、猟奇的かつ狂喜的な行動に気付けなかった。

> 恭也視点<

有り得ない―

そうとしか、言い表し様がなかった。

神速を見切られ、攻撃を避けられるならまだしも、受け止められただと!?

しかも今のはなんだ!?

俺はヤツの拳を完全に避けたはずだ…。それなのに何故、俺は攻撃くらっている。

「…ふざけるな…。」

自然にそんな言葉が、俺の口からもれる。

そう、余りにもふざけた事だからだ。俺が小学生に負ける?

それこそ有り得ない、有り得てほしくない。だが実際、俺は地に伏している、ヤツの攻撃によって。

ヤツが何をしたかは不可解だが、そんな事はこの際どうでもいいんだ。ただ…、負けたくない。

ヤツは俺をそう思わせる。

虚「キヒヤヒヤツ…、キヒヤ…ギャハハハハッ！」

俺の事をバカにする様な笑い声がカンに障る。

あの死んだ魚にも似た瞳が、頭にくる。

酔っぱらいの様な足取りに、腹がたつ。

「ふざけるなキサマ…！！」

そう俺が吠えると同時に、ヤツは未だに地に伏している俺を目掛けて駆けてくる。

いや、駆けてくる、とさえ言いがたい程の低速で、俺との距離を詰めてくる。

それに合わせる様に、俺もゆっくりと立ち上がり、ヤツに向かい合う。

虚「ギヒヒヒ…。」

お互いにあと数歩の距離に至った瞬間、ヤツは急に動きを止めた。しかし、動きが止まったのは一瞬だ。止まったと思った次の瞬間には、ヤツは俺の目の前に居た。

神速―

そうとしか思えない程の異常な速さ。

だが今なら分かる、ヤツのは”神速”ではないと。だからこそ理解した、ヤツの次の行動を…。

虚「ギッ…！」

俺はヤツが未だに持っている、俺の右側の小太刀を、左の小太刀で吹き飛ばす。

そう、ヤツの行動は至って単純だった。俺が手放した小太刀を使つての奇襲とも言えない奇襲。

単純すぎると思つたが、やはり当たっていた様だ。

ヤツは振り上げる前に、俺が小太刀を吹き飛ばした事に驚いている。だがコレだけでは終わらん！

「ハアー！」

俺は神速使つてヤツの左側に回りこむ。この時点でヤツは俺に気付いていたが、構わない。

そして、左側の小太刀を両手構えに持ち変え、刺突を繰り出した。此処までは良かったんだ。

しかし、俺はやはりヤツを軽く見すぎて居たのかもしれない…。

俺の刺突に対し、ヤツの行動はやはり単純。

いや、単純過ぎて笑う事も言葉を発する事すら出来ない。何故ならヤツは…。

虚「ガハッ…。」

俺の刺突を避けなかったからだ。

俺の小太刀は、ヤツの心臓に突き刺さっていた。

噴き出す血の飛沫。

流れる血の川。

だが、ヤツの顔は…。

笑っていた。

虚「…ギヒヒヒ…ギヤハハハハー！！」

ヤツは狂った玩具の様に笑い声をあげる。
とても愉快かの様に、快楽に浸るかの様に。

その姿は、とても小学生には見えない。寧ろ人にすら見えないだろう。

まず、心臓に刀が突き刺さっているながら、普通に立って居られる時点ですべておかしい。

「……………」

俺は小太刀から手を離して、その場にへたれこむ。

訳が分からない、ヤツはなんだ！？

俺は何をした！？

—ヤツの心臓を刺した—

そう、俺はヤツの心臓を刺したはずだ…。

今もヤツの左胸部には、小太刀が深々と突き刺さっている。

だかヤツは死なない。それ処か、狂った様に笑い続けている。

「ハハ…。」

俺は堪らず笑いが溢れる。

「ハハハハ…！」

訳が分からない、何なんだヤツは！？俺の目の前で狂い笑っているヤツは、本当に人間なのだろうか…。

「アハハハハ…！」

もう分からない。

何も理解出来ない。

どうやら俺は、ヤツの狂氣にあてられたらしい…。

いや、最初にヤツが笑い声を上げた時点で、俺はヤツの狂氣にのみ込まれて居たのだろう。

でなければ、こんな事には成らなかった筈だ…。

虚「ギヒヒヒ！痛イナァ…」ギヤハハハハ…！」

ヤツが笑う度に、ヤツの血が飛び散る。

そして、辺り一面が血の色に染まったその時…。

虚「……………」

ヤツは笑うのを止めた。

余りにも不自然な静寂がその場を包んでゆく。
さっきまでの狂った笑い声が、全くの嘘の样にも感じる。

そして、ヤツの次の行動に、俺は正気を失いかけた。

いや、既に俺は正気を失っていただろう。だが、そこから更に失いかけたとゆうだけだ。

「グシュッ…グチャ…グブウ…」

不愉快かつ耳障りな、それでいて聞きたくない様な不快音が辺りに響いた。

「ブシャッ…ギュチュ…ゴギュ…」

「ッ！…ーッ！」

俺はその場で嘔吐した。

ヤツのあまりにも猟奇的な行動にだ。

一方、ヤツの表情は変わらず笑顔。いや、目だけは笑う事はない。
相変わらず死んだ瞳だが、今はきしょく悪くギョロギョロと蠢いている。

どうしたらそう成る…。

と、聞かれて、スグに答える事が出来るほどに単純ではない。
だからこそ、あえて答える。

ヤツは俺の突き刺した小太刀を、右手で引き抜いている。
しかし、ただ引き抜いているわけではない。
ゆっくりと…

荒っぽく…

まるで痛みを味わうかの様に…

刀を引き抜いている。

狂っているだけでは済まない、異常過ぎる行動。

「…ガシャンッ！」

ヤツはとうとう小太刀を引き抜き、足下にすてる。

そして…。

虚「…オ…リカ…？」

「……？」

よく聴き取れなかった。
だが、なにか言ったらしい。

虚「…オワリカヨ？」

今度はハッキリ聴こえた。
しかし、どうゆう意味だ？

「…何、がだ？」

正直、喋るのも辛いが、オレはヤツに聞き返す。

しかし、ヤツから返ってきた言葉は、オレの質問に対する返答ではなかった…。

虚「……タリネエ」。

…そうヤツが呟いた瞬間、さっきまでの狂気が一瞬にして消えた。

…しかし、狂気が消えた次の瞬間に…。

虚「…ダレダ…？」

士郎「高町士郎…。さっきまで君と殺り合っていた高町恭也の父親だよ。」

いつの間にか、父さんがいた。

第12話／狂気二狂工。（後書き）

なんかいきなり雰囲気が変わっちゃいましたでしょ？

しかし、うーん、戦闘描写って、こんな感じで良いのでしょうか？
なんか、物足りない感じです。

第13話／俺と“俺”；

> 虚視点 <

真っ暗な空間に二つだけ、向かい合う様に玉座が佇んでいた。
一つは灰色、もう一つは真っ赤な色をしている…。

当たり前の様に、俺は灰色の玉座に座る

「…また此処かよ…。」

俺は、反対側の真っ赤な玉座に向かって話しかける。
すると…。

「キヒッ…、イツモノコトダロ？」

真っ赤な玉座から、言葉が返ってくる。

正確に言い表すと…、真っ赤な玉座に座っている”俺”から言葉が返ってくる。

その”俺”は俺と全く同じ、違うところ何で、笑い方と喋り方ぐら
いだ。

「…相変わらず下品な笑い方だ…。正直キショイ…。」

俺はあの笑い方が嫌いだ…、変態みたいだし。

「ギヒヒ…、ヒデエゝナアゝ。俺、今スゴク傷ツイタぜ？…ヒヒヒ。

」

…マジでキショイ…。

「…ハア…。何が”傷ツイタゼ？”っだよ。…何も思わなくせに…。」

「ギヒヒ…、ソウ言ウオマエダツテ、何が”キシヨイ”ダ…、本当ワドウデモイクセニ…。…ヒヒ。」

此処は《俺》の世界…。言わば《俺》の精神世界…。だと思つ。はつきりとした事何て分からない、知ろつとも思わない…。どうでもいいから…。

「…ところで、何時まで続けるつもりだよ…。」

「ヒヒ、…ナニヲ？…アア、喧嘩の事力。…何時ドウリ、燃料切レマデダ…。…ギヒヒ。」

燃料切れまで、ねえ…。
…ダルいな。

「…たまには、”お残”しても良いんじゃないか…？」

「ギヒ…、…嫌ダヨ、ソナ事シタラ怒ラレチマウヨ？…ヒヒ。」

「…誰にだよ…。」

「ヒヒ…、食堂ノオバチャンダヨ。…ギヒヒ。」

「…ハア、そうですか…。」

「ギヒツ…、溜メ息バカリシテイルト、幸セガ逃ゲルヨ？…ヒヒ。」

…あつそ、つかオマエのせいだよ。

”俺”は俺で、俺は”俺”…。

俺と”俺”で《俺》…。

…最初は俺と”俺”は全く一緒だった。違いなんて最初は全く無かった。…だけど、あの頃から変わり始めた…。

だが今は、そんなくだらない事を話すつもりは一切無い…。

…今は先にやらなきゃならん事がある。

「…ところで”俺”よ、何故にあんな戦い方しか出来ないんだ？」

これは今一番”俺”に聞きたい事である

「ヒヒ…、サアナア、俺二モ分カラ…。キヒツ…、良イジャネエカヨ、気スンナ毎度ノ事ダロ？ヒヒヒ…。」

「いや、毎度の事だからこそだ。真面目に考えて、あの戦い方はキショイ…。つか気味悪いだろ、何で態々相手の攻撃に当たる？俺なら絶対に避ける、か、向かえ討つ。」

「ギャハハハ…、一々避ケルノガ面倒臭イカラダ。ヒヒ…、ソリヤ俺ダツテ絶対ニ避ケレル攻撃ワ避ケルガ、完全ニ避ケキレナイノワ、寧ろ俺カラ受ケテヤルヨ…ギヒヒ。…マア、治ルカラ良イジャン。」

…どんな面倒臭がりだ！！

まったく、”俺”はとことん面倒臭がりだ。今に始まった事ではないが、最近はその極め付きと来ている。

”俺”はまず、表に出るのを面倒臭がる。理由はやりたい事が全く

無いかららしい。…これには同意だ。

次に、”俺”は無意識で行う呼吸や発汗、瞬きすら面倒だと言った。
…此れには言葉すら出ない。

まあ、こんな感じで”俺”は表に滅多に出ない。

…だが、たまに出てくる時がある。今の様に、急に出て来ては狂った様に戦い始める。

理由は不明、いつも俺の中で外を見ているだけなのに、俺がイラついてブチギレる度に体を横取りする。

「…はっ！つかそろそろ俺にもやらせろよ。”俺”はもう十分だろ？」

危ない危ない、もう少しで俺のぶんが亡くなるところだった。

つか”俺”に最後までやらせたら、管理者権限でベリアルを強制起動させて、破壊&虐殺&殲滅で、この町崩壊させちまう…。

…さすがに困る、…二度と翠屋のメシが食えないのは…。

「…エエト。…マア仕方ナイナア、タマニハ良イカナ…。ジャッ、選交代力？」

「ッシャア！久しぶりに暴れるぜ！！」

……道場ぐらいなら、壊しても良いよな…？

第13話／俺と“俺”；（後書き）

すいませんm（――）m

かなり更新が遅くなってきました。

これから更に遅くなってしまう。

ごめんなさいm（――）m

でも、絶対に完結させます！！

例え何年掛かろうが完結させますので、これからよろしくお願いいたします！m（――）m

第14話／…ああ、ダルい。(前書き)

すいません！m(――)m
かなり遅くなつてしまいました…。

第14話 / … ああ、ダルい。

>ベリアル視点<

… 怖っ！なにあれ、本当に人間！？

マスターは今、乱入者の高町 士郎と戦っている。… わけなんだけど。

虚「ギャハハハッ！！」

… 自分の腕を振り回すマスターです。

怖いよ！？なにしてんの！？

… いやまあね、さっき士郎さんが来たときに、「ギヒヒヒヒ…、俺モ武器ガ欲シイナァ…。」とか言つて、自分の左腕の肩口から引きちぎりやがったです…。

たしかそのとき…「テレレレテツテレ…」生ア…ムハンマ…」…ギヒヒヒヒ…」とか言つてた…。

… 危なっ！なにその最初っから血だらけのハンマー！？つか引きちぎった左腕の指がピクピク痙攣していてかなりキモいよ！！

まあそんなわけで、現在の士郎VS虚（ver狂）の戦闘をお送りしたいと思うオイラです…。

士郎「ッ…！！困ったなあ…！！」

マスターの強烈な猛攻に合わせる様にして、二刀の小太刀を振るう士郎さん。

困ったと言っているが、まだまだ余裕がある表情だ。

虚「ギャハハハハ！ヤルネエ」…ヒヒヒヒ！」

マスターはかなりイカれた表情で笑っている。

全身を血塗れにし、自身の左腕を振り回しながら、イカれた笑い声を発しながら。

その姿は、もはや戦う者ではなく、ただの狂った動物だ。

マスターの猛攻は続く、ただ自身の欲求になすがままに遊ぶ。

士郎さんは防ぐ、このイカれた遊びを終わりにするため。

「ギッ！」

突然、マスターが悲鳴をあげながら吹き飛んだ。

吹き飛んだマスターはそのまま壁に叩き付けられ、その衝撃で右手に持った自らの左腕を手離す。

マスターを吹き飛ばした犯人は、もちろん士郎さん。

士郎はマスターを蹴り飛ばした体制を直しながら、マスターに質問を始める。

士郎「…君は何故、恭也と争っていたんだい？」

そこで士郎さんは、今は道場の端で壁に凭れながら此方を見ている自身の息子に一瞬だけ目を向ける。

虚「……ギャハハハハ！理由？知ルカヨ、思イ出スノ面倒臭イシ」ソナコト、ドウデモイインダヨ！！ヒヤハハハハハ！」

士郎「ッ！…なに！？」

マスターの言葉に続いて、士郎さんは体制を崩す。

ふと士郎さん自分の足下を見る。するとあら不思議！真っ赤で血生臭いモノが巻き付いているじゃありませんか！？

そこでマスターに視線を帰ると…。

またまた不思議！マスターの左腕は治っており。さっきまで振り回していた左腕が、右手からなくなっているが。その代わりに真っ赤な紐状のモノが握られているではないか！だが、その紐状のモノの元を辿ると、ある部分にたどり着く。

それは腹部。

そう、マスターは士郎さんが恭也さんに視線を移した瞬間に、自分の腸を引き摺り出して、士郎さんの足に巻き付けていたのだ！

キモイぞ〜！実にキモイ戦い方だ〜！！生物がして良い戦い方じゃねえー！

士郎「クッ…！」

マスターの投げ縄腸に足を捕られて倒れてしまう士郎さん。

普通の縄や紐などなら迷うことなく切り捨ててるだろうが、今士郎さんの足に絡み付いているのは人体の一部。それも子供の人体だ。そのせいで切るとゆう選択肢が選べなかったのだらう。

虚「ヒヤハハハハ！甘イナァ〜、甘々ダヨ」俺ガ子供ダカラッテ気ヲ使イ過ギダネ！ギャハハハハハ！！」

そう言いながら、倒れている士郎さんに近付いてゆくマスター。

士郎さんはマスターの腸を解こうとするが、士郎さんが解こうとする度にマスターは右手に持った自らの腸を引き、度々士郎さんを引

き摺る。

虚「ヒヒヒ…」ギヤハハハハ！！殺ッチャウヨ！！モウ殺ッチャウカラナア！！ギヤハハハハ！！ゲエハハハハッ！！」

遂に士郎さんとの距離が零になったマスターは、士郎さんに向かって拳を構える。

恭也「ッ…！父さん！！」

いつの間にか走り出していた恭也さん。

…少し遅いよ。

士郎「…ピンチかな…？」

何故かまだ余裕のある士郎さん。

…底が知れない。

たぶん、この人はマスターより強い。いや、たぶんじゃなく絶対にだ。何故なら、マスターの狂気に一切あてられていないから。

狂気に錯乱してマスターに攻撃をしかける訳でもなく。精神が崩壊する訳もない。

本当に強い人だ。

だがそんなことはお構い無しとばかりに、マスターは拳を振り降ろす…。

「バガン！！」

同時に空気が破裂した音と、道場の床が砕け散った音が響いた。

…もうどうなっても知らねー。

> 虚視点ノ精神世界…だと思つ。 <

「…早く代われよ。」

「ヒヒヒ…。マダモウ少シ待ッテナ。…キヒヒヒヒ。」

チクシヨウ”俺”の野郎め、代わるとか言っておきながら一向に代わる気配すらしねえー！
…殺るか？

「キヒヒヒヒ。アッチャー、避ケラレタ♪渾身ノ一撃ダツタンダケ
ドナ…。ヒヤハハハハ。」

「下手くそ…。」

「代ワツテヤラナイ…。キヒヒヒヒ。」

「…殺す！」

「ヒヤハハハハ。…仕方ナイナア♪ンジャ、選手交代、逝ッテラ
ッシャイ！ギヤハハハハ！！」

「痔が違つ！？」

「オマエモダ！」

そして俺は現実に戻って行く。

>引き続き虚／現実<

…痛いですね…。はい、かなり痛いです…。

”俺”の野郎はかなりバカなことをやってくれちゃったな。
…全身に激痛が走る。

取り敢えず、振り降ろした拳を退き、状態を確認して見る。

「…（キモイ）…。」

案の定、原形を留めていなかった。

肉には木片が突き刺さり、指は向いちゃいけないところを向いているし、剥離骨折&複雑骨折して骨が凄いことになってる…。

「グチ…グチャ…グズ…ギチ…。」

途端に奇っ怪で気色悪い物音を発しながら元に戻ってゆく。
ああキモイ。

士郎「…君は…。」

ふと後ろに視線を向けると、”俺”の全力パンチを避けた（何をした？）高町の父親が、俺のことを凝視していた。

因みにシスコン（恭也）は、全力パンチによって起こった大音量の破裂音によって気絶している。

…バカだ。

「…キモイでしょ？自分でも思いますから…。」

治った手を振りながら、士郎さんに言う。

士郎「…あつ、いや…。すまないね…。」

まあ、普通の反応だよ…。

つか吐瀉物を撒き散らかさないだけマシだよ。

士郎「…そんなことより、君はさっきの君とは別人格なのかい？君もさっきの君も、纏う雰囲気が一緒って言うのかな…？まあ少し違う様だけど…。」

…鋭い人だなあ。”俺”を見て俺とは別人格だと気付くヤツは初めてだ…。

ベリアルでさえ気付かなかったのに…。

「好きに解釈してくれて構いませんよ。…でもそんなこと、どうでもいいじゃないですか…。」

本当にどうでもいいよ。

あんなクソツタレはほって置こう！みんな、俺との約束だぜ？

士郎「…そうか、分かったよ。…取り敢えず、君はそれも治した方が良くと思うよ？」

そう言って高町の父親は、俺の腹を指差す。…顔が若干だが苦笑いだ。

「…うわっ、こりゃキメエー。」

腹に空いた穴は塞がったが、飛び出て腹に収まり切らなかった腸が
ビチビチ跳ねている。

…こんなときは…。

「ズブ！…グチャグチャグチャ。」

「ツツテエー！！…はあゝ、取り敢えずこれでOKだ。」

もう一度手で腹に穴をあけて、飛び出たままの腸をぶちこむ。
かなり痛いのが、腹から腸をビチビチさせながらお買い物するよりは
百倍でした。

士郎「…荒い治しかただね。」

「…腹に戻しとけば、後は勝手に治りますから良いんですよ。」
お互いに苦笑いだ。

士郎「…さて、君はまだ続けるのかい？」

ああ、そう言えば…。

「…止めときますよ。貴方に敵うとは思えませんが、…腹へったし。」

「

「グウギユウウウウウウー！」

まあ、アンだけ暴れば仕方ないかな…？

そんな俺を見て高町の父親は、一瞬ポカンとした表情になり、次の
瞬間には爆笑していた。

…俺は変なことを言っ たつもりはないのだが…。

さて、ここで一つ言っておきたい事がある。”俺は戦う事がくだらない行為だと思っている”

だから”俺”との会話はほぼ嘘っぱち、ただ早く終わらして帰ってメシ食って寝たかった。

…戦いは楽しくない。ただただつまらなくて。…虚しくて、…空虚で、…虚構で、…虚栄で、…虚脱で、…虚弱な感じがする。

いつも残るのは虚しさだけ。

今は今日程度で事が済むが、後4年もすれば指一本だけで人が殺せる様になるだろう。

俺の身体だ、それくらいわかる。あの糞馬鹿神様さんに何か弄くられたのか、ここ数年の身体の成長が以上だしな。

「…どうでもいいか…。」

士郎「…どうかしたのかい？」

やっと笑い終えた高町の父親が、俺の一人語とに反応してきた。

…面倒だから笑ってるよ。

「…いや、なんでもないですよ。」

士郎「そうかい…。さて、どうしようかな。」

そう言いながら高町の父親は、道場を見回す…。

「……………」。

士郎「……………」。

…うん、酷い有り様だな。

それ以外に言い様が無いくらいに酷い有り様だ。

まず目に付くのが、”俺”が撒き散らかした血液だ。床の3分の1以上が血だらけになっている。

次に床に空いた穴。此方も犯人は”俺”だよ。

…さて、どうしよう。

「…弁償しますよ。」

士郎「…そうしてくれると、とても助かるよ。」

やっぱり、弁償する事にした。

金ならゲス神様さんから貰ったのが、いくらでも有るしな…。
…いつそのこと、全体を建て替えるってのも有りだな…。

？「…説明してくれるかしら？」

突然、道場の入り口の方から女性っぽい声が聞こえた。

…聞き覚え有るし。

「ギッ…ギギギギギ…。」

士郎「ッ！……………」

高町の父親は、錆びて壊れたブリキのオモチャの様な動きで、声の聞こえた方へ首を向けたと同時に、まるで凍ってしまったかのように動かなくなった。

流石に気になったので、俺も声の聞こえた方へ向くと…。

「……………（死んだな）。」

そこには…。

桃子「…ちゃんと説明してくれなきゃ、夕御飯は又キですよ…？」

絶対零度の空気を纏った、高町家の女帝”高町桃子”様が立っていた…。

P S . ” 虚 ”

ヒヒッ。恐イネ高町桃子ワ。…アレトワ戦イタイト思エネエーワ…。
ヒヤハハハ…。

第14話／…ああ、ダルい。（後書き）

次回からは、少しでもリリなの要素が復活する…。…かもしれない。

第15話／帰りたい…。（前書き）

長い間ほっばらかして、まことに申し訳ありませんでした！

どづぞづゆっくり読んでいって下さい。

第15話／帰りたい…。

>ベリアル視点<

現在マスターは、恭也さんや士郎さんと一緒に桃子さんに説教をくらった後、何故か高町家にお泊まりする事になったのだ！

説教を受けている間、高町家に悲鳴が何度も響いたのは、此所だけの話だぜ？

つかマスターって、よく分からんねえ…。

アレは100%人間じゃねえよ、主に精神的に…。

あんな戦い型、いくら死なないからってさ、試せる人間がいるかって話した…。

まあ、今回の最後に…ならねえ…だろうな…orz

>虚視点<

「何故こうなった!!」

と、言いたくなる。

理由は幾つか有る…。

言つのがとても面倒なので、実際に見て貰おうじゃないか…。

此れは、今日の朝の出来ごとだ…。

美由紀「虚くん朝だよ、起きないと。」

「…俺は夜行性なんで。おやすみなさい…。」

美由紀「起きなन्द、お母さん呼んで来ようか？」

虚「何をバカな！！俺はとつくに起きて居ますよ！さあ、顔を洗いに
行こうじゃないですか！！」

美由紀「フフフ」

「…………はい。現在俺は高町家にお泊り中です…。

何故かって？そんなの知るかー！！

強制的にお泊りにさせられたんだよ！あの高町家の女帝様にな…。

しかも1日だけではなく無期限らしい…orz

更に俺の地獄(?)は続く。

恭也「早く構える虚…。」

「…美由紀さん、俺は何故に此处に居るのでしょうか？俺はてつき
り顔を洗ったら朝食だと…。」

美由紀「え？お父さんから聞いてなかったの？お父さん言ってたよ
…」虚くんは危うい。だから心身ともに此处で鍛えて挙げようじゃないか♪”って。」

恭也「まあそうゆう事だ…、諦める。」

「…はあ…。」

毎朝の早朝訓練に付き合わされることになりましたね…。

つかシスコンの野郎は順応早すぎだろ！！一番に反対しそだったクセに…。

そして朝食時…。

「…いただきます。」

桃子「どうぞ召し上がれ♪たくさん食べてね♪」

「…はい。」

恭也「美由紀、寝癖が…。直してやるからちよつと動くなよ。」

美由紀「寝癖？うそ！？ごめん恭ちゃん、ありがとう♪」

士郎「虚くん、桃子の作る料理は美味しいだろう？桃子の作る料理ほど美味しいモノは無い！断言出来る！！」

桃子「やだ♪士郎さんってば♪そんな事言っても夕食のオカズが一品増えるだけですよ♪」

「……………」
「モグモグ」…。」

家族でイチヤイチャすんな！！

つかシスコンは何処までシスコンなんだよ…。バカ町^{なのは}だけじゃなくて、美由紀さんも対象ですかい。

そして、次が俺にとって最大級の地獄だ…。

「…”コレ”ですか…orz」

桃子「ウフフ♪可愛いでしょ？私と美由紀で作った傑作よ♪」

美由紀「さあ虚くん、着てみようか…？」

「…拒否権は？」

桃子& a m p・美由紀「無いよ♪」

「…ハハッ…orz」

…そして一時間後の翠屋…。

「カランカラン…。」

美由紀「いらっしやいませ〜」

「……いらっしやいませ…。」

桃子「もっと元気良く言わなきゃダメよ♪ねっ、”うーちゃん”？」

「…はい…。」

美由紀「ほら、元気だして♪”うーちゃん”」

「…はい…orz」

士郎「”うーちゃん”」

恭也「…（哀れな。…だが悪くない気が…。）…。」

「…（何だ！？この悪寒は！！）…。」

…はい、分かったな…？

そくだよ！！俺は今、女装させられて翠屋でバイトさせられてんだよ！！

理由？一番不明だよ！！

くだらない理由で戦いになったり、…やり過ぎて女帝には怒られ、無理やりに外泊させられた挙げ句に、意味不明な理由で早朝から訓練させられて…。

極めつけは女装で接客だああ！？

「やってられるかー！！」

女性客「すいませーん、注文をお願いしたいんですけど。（この子カワイイなあ♪お持ち帰りしたいなあ♪）」

「…少々お待ちを…。（悪寒がするのは気のせい？）」

男性客「……。 （グフフ…♪）」

「……ちっ…！（くそ！さっきから悪寒が絶えない！！）」

この後も俺の地獄は続いた…。

そして翠屋の手伝いが終わり、夕食をいただきながら、また家族内イチャイチャを見て。

夕食後の一番風呂をいただくことになり、脱衣場に來たのだが…。

「……何故に美由紀さんが此所に…？」

美由紀「え？何故って、一緒に入ろうかと思って…」

…一緒につて…。

ふざけるのも程々にしろよ、このブラコン女が…。オマエはシスコン野郎と入ってろ。

「絶対拒否です。」

美由紀「ええ…！？何でー！！良いじゃん別に減るもんじゃないし！」

「減るかもしれないです。てか一人で入るのが嫌なら、恭也さんに入れれば良いじゃないですか…。」

美由紀「何でそうなるの？うゝん私は良いけど、恭ちゃんはダメだよ。彼女さんいるし…」

「うわっ、シスコンの分際で彼女いんのかよっ。…キモッ。」

美由紀「…ええ〜と。今、虚くん素が出たような…?」

「…気にしないでください。そんなことより、俺は一人で入りますから、入るならお先にどうぞ。俺は最後にします。」

そう言い残して、貸してくれた部屋に行こうとしたら…。

「ガシッ!」

腕を捕まれた…。

「…離してください。」

美由紀「やだ」

…何故だ、何故こうも面倒なコトばかり起きるんだ…。

忘れてるだろうから言っておくけどな、取り敢えず俺の精神は19歳ですよ。

転生した時が16歳、その後3年の月日たちがたち現在19歳なんだよ。お分かり?見た目は灰髪緋目の奇妙な少年だがな、中身は19歳の青年なんだよ…。

だから…。

「嫌で、拒否で、無理。」

美由紀「きゃっ!?!って、待ってよ。」

美由紀さんを振り払い、猛ダッシュで逃げる俺。

…情けないな、だと？

知るか、嫌なモンは嫌なんだよ。つか、よくも知らないヤツとなんかと風呂に入りたいヤツが、この世の何処にいるってんだよ。

…いたらマジで尊敬しますよクソ野郎。

…チクシヨウ、今日中に絶対家に帰ってやる。

>まだまだ虚視点<

(「つと、ゆう訳なんだが…。」)

ベリアル(『OK!理解不能でえゝす(o^_^)(b』)

(「逝つてらっしゃい…。」)

ベリアル(『ちよつ、投げる!?!』)

(「空を自由に飛んで来なっ!?!」)

ベリアル(『はい♪タ・コプター…って、イヤアアゝ!?!』)

はいつ、ベリアルをお空に向かって全力投球しました。

理由？

簡単だ。俺のもう一つの人格である”俺”を説明したら、ふざけたからだ。

まあ、普通は信じられないだろうな…。

実際に見せてやりたいが、あの野郎は滅多に出てこないし…。

しかした、だからと言って”理解不能でえゝす(o^_^)(b”はムカツクし…。

ベリアル（『ヘルプミー！！』『ガッンッ！』『アベッ！！』）

どうやら何処かに落ちた様だ…。

知くらねえ〜」

俺は悪くないし…、つかベリアルが勝手にぶっ飛んで行っただけだし…、…嘘です俺が投げました。

「探しに行くのメンド…。」

士郎「何をだい？」

…いつの間にか、俺の真後ろに士郎さんがいた。
恐ええ〜、ちよつとビビッた。

「ああ〜、いや実は…。余りにもムカつて来たもんで、ペンダントをぶん投げちゃいました。」

士郎「そつ、そうかい…。ええ〜と、探すの手伝おうかい？」

おいおい、なんともありがた迷惑な話だ…。

あんなの五月蠅いだけだから、暫く捨てとこ〜…。

「心遣いは有り難いんですが、いらないモノなんで探さなくて良いです。…所謂ゴミです（ボソッ）」

士郎「わかったよ。…所で虚くん、君はなのはのナニなんだい？」

急に冬になった気がする…。

つか士郎さんから、黒いオーラ見たいのが立ち上ってるし…。

「ナニって、ただの知人ですかね？」

士郎「…それだけかい？」

「…あ、取り敢えずですが、クラスメイトでもありますけど…。」
士郎「そうかい…。」

黒いオーラ見たいのは鎮まったみたいだ…。

ふう〜、どうやら士郎さんは親バカらしいな…。もし今此処で俺が
ヘンな事を口走ったなら、今頃先日の様な小太刀で斬りかかられて
いたかもしれないねえ。

恐や恐や…。

「一つ聞きたいんですが、俺はいつになれば帰って良いんすかね？」

早く帰りたいんだよな…。

このまま此所に居続けたら、ストレスの溜まり過ぎて”俺”が出て
きそうだし…。騒がしいのはベリアルだけで十分だっつの…。

士郎「それは桃子に聞いてみないと分からないな。君を泊めること
に賛成はしたが、あくまで決めたのは桃子だ。」

よし決めた、帰ろう。

あのオバサンは、多分帰らせてくれないだろうし…。
んな訳で…。

虚「お邪魔しました。」

と言い、窓に手をかけたその時…。

桃子「何処に行くのかなあ、虚君」

女帝に両肩を掴まれた…。

つか何時の間に!?

高町家の住民は、気配を消す能力が当たり前なんですか？

「離して下さい…。」

桃子「ダメ」

「土郎さん助けて下さい…。」

土郎「すまないな虚君。」

俺の退路は断たれた…。

無理だ、もう逃げれる気がしないって…。

「つか、何で桃子さんが…?」

桃子「せっかくだから、虚君も一緒に寝ようかと思って」

せっかくなって何だよ…。

せっかくもクソも知ったことかつ…。

桃子「じゃあ土郎さん、虚君を持つのを手伝って」

土郎「わかった。虚君、悪く思わないでくれよ。」

両手をガツチリとホールド去れて、連行される俺。

ハタから見たら、さぞや惨めに見えただろうよ。

「……………」

終た…。

これにて、第一回高町家脱出劇は失敗にて終幕…。

psノベリアル

『誰か〜！オイラを助けて〜！って！！「ワンッ！」オイッ！？まてまで離せバカ犬！イヤー！オイラのマイボディーに涎が〜！！』

第15話／帰りたい…。（後書き）

次回からまた頑張りますので、今回は許して下さい！！

第16話／…苦しい。

> 虚視点<

それは、平凡(?)な高校1年生だったはずの俺、七詩虚におこったくだらない事件。

…転生。

受け取らされたのは、いらぬ人生。
手にいれたのは、騒がしいデバイス…。

そして楽しくない人生の二度目がスタート。

ダルい…、めんどい…。

と、そんな訳で…。

「二度目の人生終わらせてみよう。イエエ〜イ、パフパフ、ヒュ〜ヒュ〜。」

ベリアル『笑えねえー…。』

現在、俺こと七詩虚は、高町家から遠く離れた我が家に帰ってきました。

どうやって? だって…。
それはな…。

神「…オヌシ、もうちょい人生楽しもうよ！なんかワシさあ、凄
悲しいよ！？」

バカ神様さんを説得出来ましたんですな。

いやあ、世の中なんでも試してみるもんだね。

前にビチグソ神様さんから、着信があったケータイの着信履歴をみ
たら何か有ったんだよ…。

いや、最初は見間違えかと思ったよ…。(いかにもおかしいし)
だけどね、電話できたんだからしかたないよな。

さてと、話をもどそう。

「神様さんよお、俺はちゃんと云ったじゃねえか…！いらないうて、

」

神「いやじゃけど…ワシにも色々あつてなあ。…まあ仕方ないか、
オヌシが望んだことじゃし、ワシの早とちりじゃったみたいだし。」

……………軽っ。

ベリアル『軽っ！ちょま軽いよ神様！！つかオイラはどうなるの！
？折角のnewマスターなのに！！』

神「…ドンマイ、そのうち誰かが新しいマスターになってくれるさ
、でなければワシが消滅させてやるからさ、安心しなさい。」

ベリアル『マジで…？』

「よしそれじゃ神様さん、俺ごと消しちゃってくれ。」

神「OK」

ベリアル『イヤヤアア〜!!』

神「そいじゃ行くぞ〜。滅つ」

そして俺は、世界から消滅した。

…と、ゆう夢を見た。

ああ、現実だったらどんなに良かったことが…。

さて、今現在俺は登校中である。

因みに今日は月曜日、まあ一般小学生が登校していて何ら不思議に思ふ必要はないだろう…。

しかしだ…。

登校しているのは、基本毎日欠席のこの俺こと七詩虚。

…まあ登校するふりなんだがだ。

まあ、理解はある。

と言っても、高町家から一時的にでも良いから逃げたかったからなんだ。

それ以外の理由は特に無く、何故それ以外の理由がないのか…。

…それは…。

……… 苦しい………。

…あの家族を見てみると、何故か苦しい。
何かが、俺の中の何かが、俺の中の箱から出て来そうで…。

この感覚は、今までもたまにあつたが、こつちに来てからは初めて
高町なのはとあつた時…。

あと、以前高町と戦っていた、全身黒衣の少女を見た時以来か……。

流石にこのたまにくる苦しみが嫌になり、以前”俺”にこの事を聞
いたことがあつたが……

【ギャハハハハ！オイオイ、ソレヲ”俺”ニ聞イチャイケナイダロ
？自分デ考エテミナ…。ジャアナツゝギヒヒヒヒ…。】

とまあ、言うだけ言われ、精神世界的な所から追い出された…。

はあー…、一体この感覚は何なんだ。

苦しいんだ、とてつも無く苦しい…。

自分の全てを否定したくなる程に苦しい…。

だが、そんな事を気にしているほど暇は無く、襲い来る苦しさの感情と激しい頭痛に、俺はその場でのた打ち廻る。

「……………ッアッ！」

グワッ！

終には、魔力の大放出。

……怖い…。

初めてかもしれない、本気で怖いと感じたのは…。

そんな時…。

——「ごめんなさい」。

そんな一声が、俺の頭の中に反響した。

その瞬間、頭痛と苦しみはおさまった。

だけど…。

「…あ…ああ…アアアッ…アアア…。」

……………あれ…？

……俺って本当に……。

——家族居たっけ？——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1620m/>

転生は万病の元...orz

2011年10月7日12時39分発行